

創刊のことば

こころの未来研究センターは、2007年4月の設立から1年半を経た2008年11月、鴨川にかかる荒神橋のたもとに新築された京都大学稲盛財団記念館に研究の場を移すことになりました。センターのこの新しい門出を記念して、定期刊行物『こころの未来』を創刊いたします。

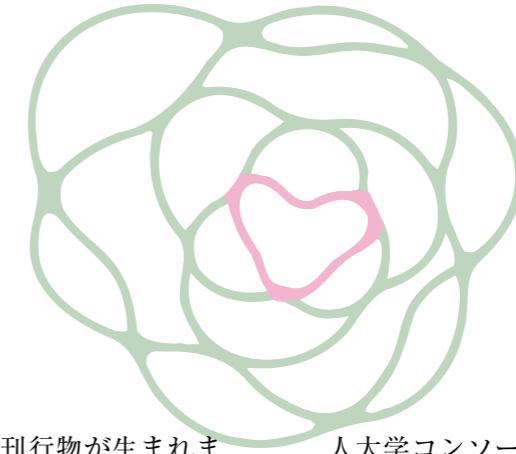
こころとからだ、こころときずな、こころと生き方。この3つの研究領域と、それらをつなぐ融合領域を探求のフィールドとして、センターに集う研究者は、日々多様な研究プロジェクトに取り組んでいます。この冊子には、その研究活動から生みだされた成果報告や研究論文、こころをめぐる研究エッセイ、対談など、さまざまな読みものが掲載されます。この冊子が今後永く、こころの未来研究センターとこころに関心をもつ多くの方々をつなぐメディアとして育ってゆくことを期待しつつ、創刊のことばといたします。

こころの未来研究センター長 吉川左紀子

『こころの未来』創刊を祝って



京都大学総長
尾池和夫



京都大学に素晴らしい定期刊行物が生まれます。『こころの未来』というたいへん魅力的な名を持つ刊行物の創刊を、こころからお祝い申し上げます。

京都大学に「こころの未来研究センター」が設立されたのは、2007年4月1日でした。その設立記念のシンポジウムと祝賀会が時計台で開かれたのは2007年7月8日でした。そのシンポジウムの開催にあたってのお祝いでも申し上げましたが、文系とか理系というような枠を取り払って、この研究センターができたということに、まず大きな特長があると私は思っています。

こころのはたらきを見つめるとき、そこには広い視野がなければなりません。こころのはたらきを、からだ、きずな、生き方という視座から見つめる教育を行い、研究活動を行う場であるという大きな特長を持っている研究センターです。

このセンターができたきっかけは、「京都文化会議」で、5年間にわたってくり広げられた議論の中にあっただと思います。「京都文化会議」は、文化庁、京都大学、財団法人稲盛財団、京都府、京都市、京都商工会議所、国際日本文化研究センター、財団法人関西文化学術研究都市推進機構、財団法

人大学コンソーシアム京都、京都新聞社、NHK京都放送局などで構成する京都文化会議組織委員会が主催して、京都で開催しました。これらの関係者のご努力とご協力で、この研究センターは誕生したと思います。もちろん、この研究センターの発足にあたって、直接あるいは間接に、研究センターに参加してくださった方々のご苦勞があったの発足でした。

京都文化会議2004の閉会の挨拶で、京都大学が生まれたころ、小泉八雲の小品集「心」が書かれ、夏目漱石の「こゝろ」が出版されたことを話しました。この漱石の「こゝろ」は英訳されてもその題名は「Kokoro」であったということをお話しました。そして、京都の地で21世紀のこころを求めて教育と研究の活動が続いていくことを願って、京都大学でもこの貴重な議論の成果を引き継いでいきたいと申し上げました。

この「Kokoro Research Center」の活動を通じて、「Kokoro」という単語が、世界の共通語となることを願っています。今後この新しい組織がますます充実して次の世代を担う人材を育て、「こころの未来」が新しい研究発表の場としてますます充実していくことを祈っています。

こころの未来
KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

2008 vol.1 創刊号 目次

創刊のことば	吉川左紀子
01 『こころの未来』創刊を祝って	尾池和夫
02 対談 総長カレーとiPS細胞	尾池和夫+吉川左紀子
07 こころの未来研究センターの設立経緯と概要	吉川左紀子
08 研究プロジェクト一覧	
10 研究プロジェクト 能動的注意に関わる 脳内神経メカニズムの解明	船橋新太郎
12 研究プロジェクト 癌患者支援プロジェクト	カール・ベッカー
14 研究プロジェクト 京都における癒しの伝統とリソース	河合俊雄
16 研究プロジェクト 青年期の社会的適応と文化	内田由紀子
18 岡本道雄先生インタビュー 戦争とこころ	岡本道雄+吉川左紀子+内田由紀子
24 論考 認知科学からこころの発達を探る	十一元三
26 論考 脳機能画像とこころ	福山秀直
28 座談会 こころと日本文化	山折哲雄+吉川左紀子+カール・ベッカー+鎌田東二
44 論考 世阿弥における「無心」の厚み	西平直
46 論考 自己矛盾のメンタリティー	北山忍
48 こころの未来セミナー報告 こころと「神秘世界」	鎌田東二
50 センターの動向 (2007.4～2008.9)	
52 スタッフ紹介	

対談

総長カレーとiPS細胞

京都大学総長 尾池和夫 + 心の未来研究センター長 吉川左紀子

心の未来研究センター設立に尽力された尾池総長に、センターに寄せる思いをお聞きし、センターのあり方を考えました。総長カレー発売で京都大学HPのアクセスが倍増した話など、興味深い話題が次々に展開されました。



吉川左紀子



尾池和夫

「こころは下にある？」

吉川 2003年から2007年までの5年間、京都文化会議という公開行事が京大で行われて、尾池先生は前総長の長尾真先生から引き継いでこの会議を主催してこられました。そのあたりのことから、お話を伺えるでしょうか。

尾池 これは「地球化時代のこころを求めて」というタイトルを持った会議で、私は4年間ですけれども、いろいろな人のお話を聞かせていただきました。この会議が終わったら何か答えが出るかなと思ったら、出てこない。それで永続的な研究機関をつくって、この精神を引き継がないといけないと考えました。そのアウトプットが「こころの未来研究センター」になったわけです。稲盛和夫さんに話すと賛同して下さって、研究センターができ、建物もでき、寄付もいただくことになりました。

私自身、毎年、文化会議の最後のまとめで話すために取材をしたり勉強したりしました。その中で1つ覚えているのは、小学生に「こころはどこにある？」と聞いたら、「下にある」と答えたのです。4年生か5年生になると難しい漢字が増えて、「思」「志」「意」などが出てくる。なかなか覚えられないでいると、お母さんや先生が「こころが下にある」と毎日のように言うんだそうです。それで「こころは下にある」と答えた。漢字はとても意味の豊かな文字で、4,000年以

上の歴史がありますから、なるほど文字を見るのは大事なことだと、その子どもの話で悟ったんです。

吉川 「地球化時代のこころを求めて」というタイトルはどなたの発案なのですか。

尾池 タイトルはみんなで議論して決めました。「こころ」をそのまま使うことになってよかったと思っています。私は「こころ」という言葉にこだわっていて、いろいろ調べました。フランス語の「mon cœur」（私のこころ）はシャンソンにありますし、『Cuore』（こころ）というイタリア語の本（エドモンド・デアミーチス著）が翻訳されて、カタカナで『クオレ』として出ていました。韓国では「心」という漢字を「シム」と読み、「心」や「心臓」を表すのですが、それとは別に、日本語の「こころ」「気持ち」に近い「マウム」という言葉があります。

「Kokoro」を国際語にしたいと思いますが、それとともに、いろいろな国の人が「こころ」をどういうふうに表示しているかという言葉の収集も、このセンターの1つの仕事にしてほしいと思っています。

「こころ」のコレクション

吉川 こころの未来研究センターができたすぐのころに、人文研の金文京先生が「『心の未来記』という文書が室町時代にあったようです」と教えてくださ

忌忍志忘忠念忽忿怒思怠急忽恁恋恐
 恕恙恚恣息恂悉悠悪窓悲惠惑惠悪惣
 惹葱想眷愁愆愈愍愚感慈愬愿態慝慙
 慧愆慰愆愆憊熹憇憲勲懇應瀟懲懸戀

下に「心」のつく漢字の例

ました。私はまだ調べていないのですが、予言の書らしいんです。

尾池 それはぜひ捜してください。世界中に「こころ」という言葉を使った本がたくさんあるはずですよ。そのコレクションをつくったらいい。ちゃんと宣伝すれば、いろいろな人が寄贈してくれると思います。文献集とか論文も含めて、各国語の「こころ」の本をすべて集める。そして、研究に来る人はそれを参考図書として利用できるようにする。

吉川 それはいいですね。京都の六道珍皇寺というお寺に、鎌倉時代か室町時代の曼荼羅図があります。先日、センターの先生たちとお寺に行ってきたのですが、ちょうどその曼荼羅図が公開されていて、間近に見ることができました。真ん中に「心」という漢字を書いた「熊野観心十界曼荼羅図」というもので、誕生から死まで人間の一生が春夏秋冬の季節の移りかわりとともにとても詳細に描かれており、中世の「こころ観」を表す図像としてとても説得力がありました。

尾池 そんな画像も含めて、何十年かかってもいいから、世界中の、見える形になった「こころ」のコレクションをすればいいですね。

京都文化会議で話を聞いていると、さまざまなこころが出てくる。でも、全部人のこころです。しかし、日本人は物にもこころがあると考えてきました。草花のこころ、大地のこころ、星のこころ……。

ある雑誌の環境問題特集で、毛利衛さんが宇宙から見た地球の話を書いていました。もし人類が減びてしまっても、生き物が全部死に絶えても、地球はそのままあるに違いない。そのときのことまで考えた環境問題論も必要ではないかと彼は言います。地球社会の調和ある共存と言っているが、それに失敗して人間が死に絶えたあとも地球にこころが残っているのか、ぐらいつまでこのセンターで考えていただくと永続性が出てきます。

豊かなこころは全身で支える

吉川 「こころの探求」というと、人文科学的な研究をまず考えますが、先生は、理系的なアプローチでもこころの探求は可能だと思われませんか。

尾池 思います。私が一番最初に「こころってどこにある？」と聞いたのは利根川進さんなんです。彼は京大で私のクラスメイトだったのですが、即座に頭を指して「こころや」と言いました。彼は今、脳の研究をしていて、それは記憶の研究から始められていますが、最終的にはこころの研究をしたいようです。

こころは脳だけではなく、^{はら}肚にもありそうだと、というのが、理系の究極の目指すところだと思います。いろいろな生物は頭が切られても体はピクピク動いていますし、そこにこころがあるかもしれない。胆が座っているとか、腹が黒いとか、もともと^{ちんどん}丹田にこころがあって、それがだんだん上がって

きて、今は脳にあることになっている。

吉川 「丹田にこころがある」とこう言われると、何となくそうだなと納得できるのが（笑）不思議ですね。

尾池 私は、全身で脳を支えているんだと思うんです。それを理由にして、「うまいものを食べせろ」といつも言う（笑）。「衣食足りて礼節を知る」ですね。

だから、豊かなこころは全身で支える。しかし、おいしいものを食べて栄養を摂ればこころが豊かになるかという、妙なところで不満が出てきます。ストレスとかね。そういうものは、大脳をメディアにしてやり取りする中で出てくる。そのへんが今一番テーマになっていますが、例えば、どういうものを食べていればこころが豊かになるかとか、本当に衣食が足りれば礼節を知るのかとか、そういうことも、このセンターの大きなテーマだと思います。

吉川 なるほど、物質的な豊かさとこころの豊かさにはどのような関係があるのか、と考えると、いろいろ



熊野観心十界曼荼羅図(六道珍皇寺蔵)

なことが見えてきそうです。

幸せの論理、しわ寄せの論理

吉川 ころの未来研究センターは、名称からいばまさに「地球化時代のころを求め」センターということになるわけですが、ころ、というのは捉えどころがないものですから、焦点の合わせ方がなかなかむずかしい。最近思いついたのは、人間のころを「外からの働きかけに応えるときに生来のパワーが発揮される何か」と見ると、少し捉えやすくなるかもしれない、ということです。個の自律性とか主体性といった見方とは真逆なんです。受け身の能動性、といったらいいのか……。ころの変化や成長が何によって引き出されるのか、ころが豊かになる環境というのは、自然環境であれ社会環境であれ、それはどんなものか、というような視点で考えていくと、ころというもののいろいろな側面が具体的に見えてくるような気がしています。

社会と人間との関係を考えるときにも、うまくその人のころを動かす何かと出会える場が提供されているかどうか、から考えることが大切で、それが若い人にとっては大学であったり、そこでのさまざまな人との出会いであったりする、といったことがいえると思います。

尾池 そういう場に入ることができた人はとても幸せですね。それで一生懸命やると、そのお返しが向こうからも来るし、自分も感謝してまたお返しをする。それは幸せの論理で、大学はそんなふうにできたらいいと思ってやっています。

しかし、そううまくいかない面もある。私はそれを、「幸せ」に対して「しわ寄せ」の論理と言っています。一生懸命やったら先生にぼろくそに言われたりして、恨みを持つ。すると「お返し」ではなくて「仕返し」

になる。卒業してから、あんな大学はぶっ潰せ、となっていくこともある。

どこで違ってくるのか。よくそれを本人のせいにする人がいて、人間ができていないからだ、恩を感じないほうが悪いという。だけど、必ずしもそうではないような気がします。私は、人間はふとしたきっかけでどっちへ行くかわからない存在だと思っています。

吉川 本当にそうですね。私の研究テーマの1つは、表情に表れる感情なのですが、特定の感情が生まれるきっかけは何か、なぜその感情が生まれるのか、というのは、非常にむずかしい問いです。あることを経験すると、全員が怒りを感じるとか、悲しみを感じるとか、そうした共通のころの動きがあるのではなくて、同じ嫌なことや、つらいことを経験しても、人によって、あるいは同じ人でも時と場合によって、怒りが喚起されたり、悲しみになったりします。その人がもともと持っている素質や経験の違い、知識量なども影響するでしょうが、何か、一瞬の出会いやタイミングのような偶然も、ころの中に生まれる感情を左右しているように思います。その仕組みの詳しいところはまだよく分かっていません。

尾池 一瞬のスイッチがあるのでしょうか。そのスイッチはかなり生理的なもので、例えば、食べ物の種類で変わるようなものではないかと思うんです。カルシウムが足りないとカッカするネズミがいる。人間もそういう面があって、栄養状態が悪いと、スイッチが悪いほうに入ることがありますね。

総長カレーとiPS細胞

吉川 さきほど尾池先生から、ころの未来研究センターでは草花のころや大地のころまで含めて考え



るように、と言われてちょっと困ったなと思ったのですが(笑)。それでというわけではありませんが「京都大学のころ」について、少しお話を伺いたと思います。

いま「京都大学のころ」を象徴するものは何か、と聞かれたら、私にとってそれは「総長カレー」なんですね(笑)。どうも不思議なのは、総長カレーはこれまでとは違う新しい京都大学の象徴のようでもあるし、京都大学100年の伝統の中から生まれた象徴のようにも思えるということなんです。きっかけは、尾池先生が大学生協食堂のカンフォアラで期間限定のカレーのメニューを出すことを提案されたことでしたよね。

尾池 学生から、自分たちはなかなか直接総長に会う機会がない。もう少し総長に親しみを感じる企画をしたい。例えば総長がコーディネートしたメニューで飯が食えるというのはどうか、と言われたのが始まりだったんです。

吉川 そのカレーは私も食べましたが、おいしいと評判になって期間を延長し、カンフォアラの定番メニューになり、さらにレトルトにもなって、今では京大名物の1つになりました。それは、iPS細胞で京大の名前が世界的に知られるのと性質は違いますが、本当に京大らしいなと思いました。

尾池 最初に学生が求めてきたということに大きな意味があります。大学では学生が求めることがきっかけでないと物事はうまくいかないんです。いくらこちらから仕掛けてもだめなので、私は「放し飼いかし」と言っていますが、病気をしないようにきれいな場所をつくって、自由奔放に走り回るニワトリを育てる。だけど、元気がいいからいろんなことを言ってくる。それをすぐに受け止める。総長はそういう役目だと思います。

iPSとカレーの違いですが、私が京都大学を紹介するときによく使うのは、イノベーション・アンド・トラディション (innovation and tradition) という言葉です。イノベーションは先生たちがやる。これがiPS細胞研究センター(京都大学物質-細胞統合システム拠点iPS細胞研究センター)の話で、京大は放っておいても優秀な人が集まってくるから、それも放し飼いにする。そうすると、勝手に世界を目指して活躍するわけです。山中伸弥さんも神戸大学を卒業して奈良先端科学技術大学院大学遺伝子教育研究センターに行っていて、京大へ来た。すると、そこへまたいい学生が集まってくるのです。

一方、カレーはトラディションのほうです。ニワトリが病気にならないような場所を守っているのが自由の学府というトラディションです。学生が求めてきたとき、何が一番京大の風土に合うか考える。何層もあるハンバーガーを売り出すと話題にはなるかもしれないけれど、京大という学府に合わないから、総すかんを食らいます。

尾池 大学とまったく関係がないものを作って売っても金儲けだと世間の人は見ますから、総長カレーにしてもビールにしても、ちゃんと説明できるようにしています。

日本人でカレーライス初めて食べた人って誰だか知っていますか。カレーライスの物語にはたいてい出てきますが、京大の第6代総長山川健次郎なんです。アメリカへ留学する船の中で、何かご飯が食べたいが、お米のメニューはカレーライスしかないというので、カレーライスを食べたはずかと回想録に書いてある。でも、誰もそんなことは知らないでしょう。

吉川 はい、知りませんでした。

尾池 うちの元総長が日本人で初めてカレーライスを食べたんだから、京大の名物としてカレーのレトルトパックぐらい売ってもいいでしょう。

発売元のKB S 京都は、売り出すときに私の写真を入れたいと言ってきたんです。絶対にだめだと言いました。総長が誰に代わっても総長カレーは第6代総長山川健次郎のカレーで、私のカレーじゃない。これだけ説明したら、だいたいの方は京大でカレーを売っている理由に納得してくれます。

学生の意見を聞きながらやらないといけないと思うから、カレーもお米をいくつかとルーをいくつか組み合わせて15種類ぐらい考えて、これでフェア

カレー発売でアクセス倍増

をやつたらと提案しました。そうすると人気投票ができる。必要ならその上位のものを残せばいいという意識があったので、アンケート方式を仕掛けたのです。また、当時のカンフォーラの中島店長が料理の腕がいいことを知っていました。あの人は15種類をやれるということで頼んだところ、採算度外視で徹夜しながら試作してくれたんです。

私は、総長はトラディションと広報の係だと思っています。京都大学の名前を売り込むことが私の使命なのです。研究は勝手にやってくれるけれども、カレーは私がやらないと誰もやらない。ヤファーがインターネットでカレー発売のニュースを出してくれると、京都大学のホームページのアクセスがばっと増えたんです。日ごろは2.5万ビジットですが、そのニュースのときはほぼ2倍になった。京大なんかまったく見たこともなかった人が5万人見に来たのです。広報機能としてはすごい量でしょう。

京大生協でのレジ袋削減というニュースがヤファーで出たら、アクセスが何万人か増えました。その次の日がIPS細胞研究センターの設置でした。すると、それに匹敵するぐらいアクセス量が増えました。レジ袋削減の効果はすごい。3カ月後には、学生がレジ袋をほしいという率が1割を切りましたから。

現場を見る、いつも意識調査をする、広報が大事、それをセットにして私は毎日仕事をしています。その結果がときどき成功する。カレーは成功例でしょうね。

尾池 私は専門の地震のことで自分のサイトにエッセイを載せていますが、総長になる前に、自分がエッセイで書いたとおり鳥取で地震が起きました(2000年10月6日の鳥取県西部地震)。フジテレビが、こんなエッセイがあるといって放送した途端、ホームページのアクセスが何百と走ったんです。こんな世の中になったんだと思ったものです。そこで、総長になったとき、いろんなことはできないけれども、京都大学のホームページのアクセス量を増やそうと思いました。

今は若い人はみんなヤファーを見ている。だから、ヤファーがトップに上げるようなニュースを出すことを心がけてきました。カレー、ビール、エビフライ、エコバッグ、レジ袋、一生懸命やると、ちゃんと世の中は受け止めてくれることがわかりました。

こころの未来研究センターも、私は名称



「総長カレー」のレトルトパック

から「未来」を取るなということと、「こころ」を平仮名にすることだけはしつこく言いました。

吉川 「こころの未来研究センター」という名称は、設立準備の委員会などでは「何、それ?」という感じであり褒めてもらえませんでした。大学以外の人たちの評判はともいいですね。

尾池 看板ですから、外の人注目してくれることが重要ですね。

吉川 こころの未来研究センターは、ひとつひとつの研究に対してじっくりと時間をかけて取り組む場となるのが大事だと私は思っています。それから、若い人がこういうセンターができてよかったと思うセンターにすること。そして、ときどき、総長カレーのように、みんなが「えっ」と注目するような何かを……。

尾池 それはあんまり考えないで(笑)。最初の話ではないけれども、考え過ぎて答えが返ってこないとお返しではなく、仕返しになりかねない。自然体でいていただけたらいいと思います。

吉川 それをうかがって、安心しました(笑)。研究センター、というとピラミッドのように、成果をひとつひとつ積み上げていって何かをつくりあげる場所というイメージがありますけれども、こころの未来研究センターは、ピラミッドモデルではなく、里山モデルを採用したい(笑)。さまざまな専門領域のこころの研究者が集う里山というイメージで考えてゆくと、いいセンターになるのではないかと考えています。

尾池 そのとおりでしょうね。

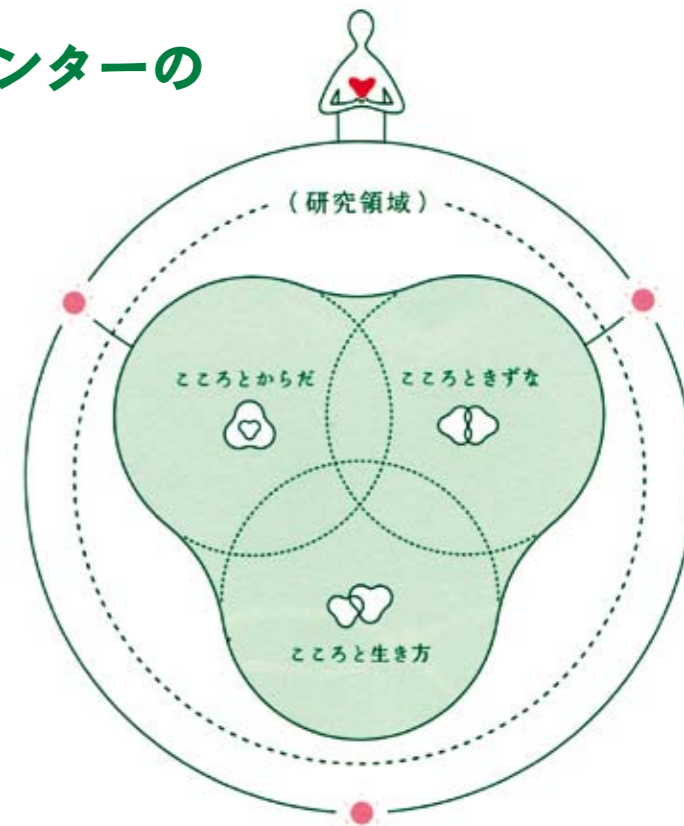
吉川 今日は貴重なお話をありがとうございました。

尾池 ご苦労様ですが、よろしくお祈りします。

(2008年6月23日、京都大学にて)

こころの未来研究センターの 設立経緯と概要

こころの未来研究センター長
吉川左紀子



京都大学こころの未来研究センターは、こころについての学際的な研究センターとして2007年4月1日に設立された。本センターは、「こころ」という目に見えない対象を正面に据えて、そのはたらきの解明をめざして多彩な研究プロジェクトを推進するユニークな研究組織であり、さらに、その成果に基づいて、未来に向かって生きるこころのあり方のヴィジョンを提示することを長期的なミッションとして掲げている。

研究スタッフは、現在、専任教授5名と助教4名、事務スタッフは事務長(兼任)、専門職員、および非常勤職員3名。京都大学では一番小さな研究センターだが、学内外の連携研究員の方々の協力を得て、現在20もの研究プロジェクトが立ち上げられ、それぞれ順調に進行している。

こころの未来研究センターの設置には、21世紀COEの「心の働きの総合的教育研究拠点」、および京都大学が京都府、京都市、稲盛財団などとともに開催した「京都文化会議：地球化時代のこころを求めて」とい

う2つの先駆的事業が深く関わっている。本センターは、この2つの事業の成果を発展させる形で、「こころ」を探求するための研究組織として設置された。「こころの未来」という名称が認められるまでには、大変長い議論があったのだが、尾池和夫総長から強い後押しをいただき、「こころに生まれる未来の時間、こころが生きる未来の社会」という2つの時のイメージを織り込んだ「こころの未来研究センター」は、無事スタートした。センターの英語名称は、Kokoro Research Centerである。Kokoroが国際語として認められるよう、本センターから、その名にふさわしい研究成果を国内外に向け発信していきたいと考えている。

センターには「こころとからだ」「こころときずな」「こころと生き方」の3つの研究領域がある。センターで実施されるプロジェクトはいずれも、これらの領域、あるいは複数の領域にまたがる形で設定されている。からだ、きずな、生き方という3つのキーワードを決めるまでにはかなり時間をかけて話し合い、最終的には、「この3つが重要だ」という

私たちの信念、直感にもとづいて決定した。人文、社会、自然科学のいずれのアプローチでもかまわない、この3つの領域とその融合領域の研究をバランスよく進めてゆくことで、「こころ」というものの本質に少しでも近づくことができるのではないかと考えている。

これまでに、センターでは神経科学、認知科学から民俗学、宗教や芸術まで含む、幅広い専門領域の講師を招いてすでに27回にのぼる公開セミナーを開催してきた。2008年度からは京都府との連携事業で公開シンポジウム「こころの広場」も開始している。こうした企画は、週日の午後から夕方という時間帯に実施されることが多いにもかかわらず、学生や教職員だけでなく一般市民の方々も数多く参加されており、センターへの問い合わせも多い。本センターで実施されるこころ研究への強い期待を感じるとともに、今後、新しい研究の場である稲盛財団記念館で進められる多彩な研究プロジェクトの成果が、本誌やインターネットを通じて広く社会に発信されることを願っている。



**KOKORO
RESEARCH
CENTER**
KYOTO UNIVERSITY

研究プロジェクト一覧

* 京都大学こころの未来研究センターはセンターと略称

■能動的注意に関わる脳内神経メカニズムの解明

人が周囲のできごとと関係なく、能動的に何かに注意を向け続けるときに、どのようなこころの働きや時間的変化が生じているのか、「こころの窓」とも評される目の動き（眼球運動）を手がかりに探る。これにより、こころの状態や動きを作り出す基礎的なメカニズムを考察する。
研究代表者 船橋新太郎（センター教授）
連携研究員 福山秀直（京都大学大学院医学研究科教授）、澤本伸克（同助教）、齋木潤（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、山本洋紀（同助教）、小川正（京都大学大学院医学研究科講師）
センター参加教員 番浩志（センター助教）

■依存症に関する総合的研究

携帯電話依存、ゲーム依存、ギャンブル依存など、薬物依存とは異なる新たな依存症に対し、その生起メカニズムや治療・支援法の開発などの基礎的・臨床的研究と、防止と改善のための対策立案が急務である。特にゲームやギャンブルへの依存症の生物学的要因に注目し、「はまるこころ」の仕組みにかんする基礎的研究を実施する。
研究代表者 船橋新太郎（センター教授）
連携研究員 福山秀直（京都大学大学院医学研究科教授）、谷岡一郎（大阪商業大学学長・教授）、勝見幸則（大阪商業大学アミューズメント産業研究所主任研究員）
センター参加教員 番浩志（センター助教）

■発達障害における心理療法的アプローチ

発達障害については、近年において薬物療法と訓練教育が中心となっているが、心理療法的アプローチも成果をあげていると考えられる。事例検討会から、心理療法的アプローチのエッセンスを抽出することで、倫理的問題や個別性の限界を越えて、心理療法から見えてくる発達障害へのアプローチを検討し、専門家や一般にフィードバックする。
研究代表者 河合俊雄（センター教授）
連携研究員 田中康裕（京都大学大学院教育学研究科准教授）、片畑真由美（同助教）、竹中菜苗（同）、十一元三（京都大学大学院医学研究科教授）、黒川嘉子（佛教大学講師）
共同研究員 畑中千紘（センター特定研究員）

■青年期の社会的適応と文化

青年期の「ひきこもり」などの不適応について、国際共同研究を含む対人関係・自己認知および感情についての研究から現代日本の青年のかかえる問題を探る。それを元に適応的なこころの働きを促進する介入アプローチを探索し、教育現場や社会集団へのフィードバックを行う。
研究代表者 内田由紀子（センター助教）
連携研究員 北山忍（ミシガン大学教授）
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）

■教育現場の現状把握と支援に関する研究

中高学校の教員は、礼儀作法やいのちの尊重、自尊心といった、従来は家庭や地域社会が担ってきたこころの教育を求められることも少なくない。教員が抱える問題や悩みを調査し把握する。これを通じて、現場のニーズに応じた教員のこころの支援プログラムを開発する。
研究代表者 ベッカー・カール（センター教授）
共同研究員 有田恵（同特定研究員）、山本佳世子（京都大学大学院人間・環境学研究科大学院生）、井藤美由紀（同）、大崎真奈美（同）、林貴啓（立命館大学非常勤講師）

■要介護者の主介護者におけるバーンアウトとその関連要因

高齢者が人口の2割を超える社会において、介護者のかかえる問題の

把握は不可欠である。特に主介護者がバーンアウトする要因を明らかにすることを通じ、介護する側、介護される側のこころにとってより良い介護をもたらす支援の形を探る。
研究代表者 ベッカー・カール（センター教授）
連携研究員 木下彩栄（京都大学大学院医学研究科教授）、久保田正和（同助教）
共同研究員 日吉（谷口）和子（同大学院生）

■発達障害の認知・感情特性と療育的関わり

学習障害児や発達障害児の抱える問題に対して、学習の困難さをもたらす認知機能と脳機構の関連を基礎研究により明らかにする。その上で基礎研究のフィードバックを含みつつ、個々の学習障害児・発達障害児のこころの特徴に応じた療育プログラムを開発・実施する。
研究代表者 久保（川合）南海子（センター助教）
連携研究員 正高信男（京都大学霊長類研究所教授）
共同研究員 伊藤祐康（京都大学大学院理学研究科大学院生）、福島美和（同）
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）

■共感的対話の相互作用性

心理臨床のカウンセリング対話に焦点をあて、優れた聴き手のもつ特性を明らかにすることにより「対話すること」が人間のこころに持つ意味を実証的に明らかにする。これにより、さまざまな人間関係におけるコミュニケーション不全を回避し、「深い対話」を促進する手がかりを得ることを目指す。
研究代表者 吉川左紀子（センター教授）
連携研究員 桑原知子（京都大学大学院教育学研究科教授）、渡部幹（早稲田大学准教授）、小森政嗣（大阪電気通信大学准教授）
共同研究員 長岡千賀（センター学振PD）

■現代における自己意識・他者意識の研究

日本人のこころが、日本古来の自己意識・他者意識から、明治期以後の急速な近代意識の確立を経て、現代、いかなるものに変化しつつあるのか、心理療法の事例、文学・芸術作品の検討、さらには思想的なアプローチを含めて研究し、日本古来のこころが、未来にたいしていかなる可能性を開くのか検討する。
研究代表者 河合俊雄（センター教授）
連携研究員 矢野智司（京都大学大学院教育学研究科教授）、西平直（同）、田中康裕（同准教授）、吉岡洋（京都大学大学院文学研究科教授）、赤坂憲雄（東北芸術工科大学教授）、岩宮恵子（島根大学教授）、猪股剛（群馬大学准教授）
共同研究員 畑中千紘（センター特定研究員）

■ソーシャル・ネットワークの機能グループ内の「思いやり」の性質

対人ネットワークのしくみについての調査を通して、人と人とのつながりがうまく機能する場面はどういったものであるのか、相手の気持ちを慮る「思いやり」がポジティブに機能している集団はどのようなものなのかを探る。この調査により、コミュニケーションと感情に関わる様々な問題についてのより詳細な理解が進むと考えられる。
研究代表者 内田由紀子（センター助教）
連携研究員 Vinai Norasakkunkit（ミネソタ州立大学准教授）
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）

■がん患者のSOC（生きがい）調査

がん患者は、病気だけでなく、その治療からも身体的、心理的、社会的変化というストレスを受ける。そうしたストレス状況への対応において、個々の患者のこころの在りようがいかなる影響力を持つか、首尾

一貫感覚（Sense of Coherence）を測定することにより実証的に検討する。
研究代表者 ベッカー・カール（センター教授）
連携研究員 林優子（京都大学大学院医学研究科教授）、赤澤千春（同准教授）、高橋美和（同助教）
共同研究員 中嶋文子（京都大学病院看護部看護師長）、高野満希子（同）、竹下麻美（同）

■甲状腺疾患における心と体の関係の研究

心身症の1つである甲状腺疾患について、患者のこころを統計的研究とカウンセリングを伴う事例研究の2つの側面から理解し、さらには心理療法と身体的治療の関連を探る。これにより、こころと体の関係が心身の不調に与える影響を探る。
研究代表者 河合俊雄（センター教授）
連携研究員 野間俊一（京都大学大学院医学研究科助教）、田中美香（隈病院臨床心理士）、金山由美（京都文教大学准教授）、桑原晴子（同助教）
共同研究員 梅村高太郎（京都大学大学院教育学研究科大学院生）

■京都における癒しの伝統とリソース

京都におけるお寺・神社・祭りなどは、多くの人がこころの安定や癒しを求める場や儀式となっている。認知科学、臨床心理学、宗教学などの多角的な視点から、それらが持つこころを癒す仕掛けを解明し、さらには時代を超えて使える「臨床の知」として紹介していく。
研究代表者 河合俊雄（センター教授）
連携研究員 渡邊克巳（東京大学准教授）、駿地真由美（追手門学院大学准教授）
センター参加教員 鎌田東二（センター教授）、吉川左紀子（同）

■こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究

人類が「こころ」をどのようにとらえてきたかを、宗教・哲学・芸術・思想などの側面から思想的考察を加えつつ、霊長類とヒトのこころについての連関と差異について、またこころ観の文化差や地域差や時代差や精神疾患との関係についても考察する。「こころ観の研究」を通して、さまざまなこころ研究の思想的前提を確認し、共通の土俵作りや、それぞれの研究者のよって立つ位置の自覚を促す。
研究代表者 鎌田東二（センター教授）
連携研究員 山極寿一（京都大学理学研究科教授）、松本直子（岡山大学准教授）、湯本貴和（総合地球環境学研究所教授）、矢野智司（京都大学教育学研究科教授）、棚次正和（京都府立医科大学教授）、氣多雅子（京都大学大学院文学研究科教授）、末木文美士（東京大学教授）、黒住真（東京大学教授）、西平直（京都大学大学院教育学研究科教授）、上野誠（奈良大学教授）、高橋義人（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、入来篤史（理化学研究所グループリーダー）、加藤忠史（同）
共同研究員 大石高典（センター特定研究員）、石井匠（京都造形芸術大学非常勤講師）、上本雄一郎（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得退学）
センター参加教員 吉川左紀子（センター教授）、河合俊雄（同）、番浩志（同助教）、平石界（同）、内田由紀子（同）

■こころとモノをつなぐワザの研究

「こころ」に迫る視点として、こころとモノをつなぐ媒介者としての「ワザ」を考察する。「ワザ（技・業・術）」とは、人間が編み出し、伝承し、改変を加えてきたさまざまな技法群で、呼吸法や瞑想法などの身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術、諸種の儀礼や学芸やライフスタイルを含むが、そのワザの力と諸相を探究する。
研究代表者 鎌田東二（センター教授）
連携研究員 梅原賢一郎（京都造形芸術大学教授）、岡田美智男（豊橋技術科学大学教授）、藤井秀雪（京都造形芸術大学教授）、上林壮一郎（同准教授）、大西宏志（同）、内田樹（神戸女学院大学教授）、山本ひろ子（和光大学教授）、菅原和孝（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、小林昌廣（情報科学芸術大学院大学教授）、井上ウィマラ（高野山大学准教授）

共同研究員 大石高典（センター特定研究員）、松生歩（京都造形芸術大学教授）、関本徹生（同）、松井利夫（同）、石井匠（同非常勤講師）、須藤義人（沖縄大学専任講師）、大重潤一郎（NPO 法人沖縄映像文化研究所理事長）、近藤高弘（造形美術家）、佐久間庸和（北陸大学客員教授）、上田洋平（滋賀県立大学地域づくり調査研究センター研究員）

■Webによるこころの研究ニュースの発信

本プロジェクトでは、こころに関する研究を紹介する記事をWeb上にブログ形式で公開し、科学的な「こころ」の研究の成果を、広く一般に還元することを目指す。「こころ」について、何が明らかになっており、何が明らかでないのかということの正確な知識の普及は、人々が現在のありようを理解し、未来を考える上での基盤となるだろう。
研究代表者 平石界（センター助教）
連携研究員 田村亮（埼玉学園大学専任講師）
共同研究員 池田功毅（東京大学大学院総合文化研究科大学院）

連携機関とのプロジェクト

■こころの未来育み事業

こころの未来研究センターと京都府の協働により、地域と連携した研究の成果等を、セミナーの開催や府施策への活用等によって、若者をはじめ幅広い府民に還元し、豊かなこころを育む機会を提供する。
委託者 京都府府民労働部
受託代表者 吉川左紀子（センター教授）

一般公募型連携プロジェクト

■<モノ>の表情・眼力の実証研究

仏像などの<モノ>は心理的・宗教的・文化的に人々をつなぐ力を持つ。そうした<モノ>が人のこころに対して持つ力がどこから来るものなのか、実際の人間の表情・視線・姿勢と、<モノ>に転写されたそれらの関連を、実験心理学や脳科学の手法を用いて探ることにより、実証的に明らかにする。
研究代表者 渡邊克巳（東京大学准教授）
センター受入教員 吉川左紀子（センター教授）

■NEET in Japan culture:Examining the Origins and Structures of Attitudes and Malleability of Self

学生、若手の就労者、「ニート」と呼ばれる人々を対象に、自己の可塑性、明示的、潜在的自己意識についての国際共同研究を含む調査を行う。それを元に、文化・社会構造とこころの働きとの関わりを重層的に精査し、目標や行動意欲を失った人々にとって、日本文化の肯定的側面が機能するためにはどのようにすればよいか、その対処法を探る。
研究代表者 Vinai Norasakkunkit（ミネソタ州立大学准教授）
センター受入教員 内田由紀子（センター助教）

■「社会的こころ」の多様性の進化的・遺伝的基盤に関する研究 -双生児法による

社会的生物であるヒトは、他者とのかわりにおいて働く「社会的こころ」を進化的・文化的に獲得してきた。そこにみられる個人差は、翻って社会の多様性にも繋がっている。「社会的こころ」の形成過程とその多様性もつ機能を、進化心理学と行動遺伝学の理論に基づいて、双生児法を用いて実証的に明らかにする。
研究代表者 安藤寿康（慶應義塾大学教授）
共同研究員 敷島千鶴（慶應義塾大学先導研究センター研究員）
センター受入教員 平石界（センター助教）

研究プロジェクト

能動的注意に関わる 脳内神経メカニズムの解明

船橋新太郎 (こころの未来研究センター教授)
Shintaro Funahashi

本研究プロジェクトの ねらい

私たちは突然現れた異様なものに反射的に注意を向けたり、周囲の出来事を見逃してあるものに注意を集中し続けたりすることがある。前者は受動的注意、後者は能動的注意と表現される。注意がどこに向けられ、それが時間とともにどのように変化するかは、その時のこの動きや状態と密接に関わっている。一方、「目はこの窓」と表現されるように、視線によって注意の向きを知ることができる。そこで、視線の動きを指標に、注意が向けられる対象を選択するしくみ、対象への注意を維持するしくみ、目標刺激と妨害刺激を区別するしくみなどを明らかにすることにより、こころの動きを考察する。

研究の目的

注意を向けている対象を知る代表

的な指標として、視線の向きが用いられる。視線の向きや動きの制御に関わる部位としていくつかの脳部位が知られているが、中でも前頭葉にある前頭眼野は眼球運動の発現や制御に中心的な役割を果たしている部位である。また、この部位の損傷により注意の障害が現れることもよく知られている。そこで、前頭眼野の働きをもとに、能動的注意のしくみを検討する。

動物実験により、前頭眼野内に視野のトポグラフィックな表現のあること、また、眼球運動の方向や大きさに関するトポグラフィックな表現のあることが明らかになっている(図1・2)。しかし、ヒトの脳における前頭眼野の正確な位置の決定や、動物実験で観察されている視野や眼球運動パラメータのトポグラフィックな表現がヒトの前頭眼野にも存在す

るかどうかの検討はなされていない。そこで、ヒトの脳での前頭眼野の正確な位置決定方法の確立と、ヒトの前頭眼野においても視野や眼球運動パラメータに関するトポグラフィックな表現があるかどうかを、fMRIによる脳機能イメージング研究により検討した。

方法

実験協力者にはMRI装置の中で画面中央の注視点から周辺の目標位置へ向かう眼球運動を行ってもらい、その間の脳活動をfMRIにより計測した。目標位置を時計回りまたは反時計回りに30°ずつ移動させ、目標位置へ眼球運動を行う課題と、注視点を見続けるだけの課題を交互に行ってもらった。前頭眼野における眼球運動方向のトポグラ

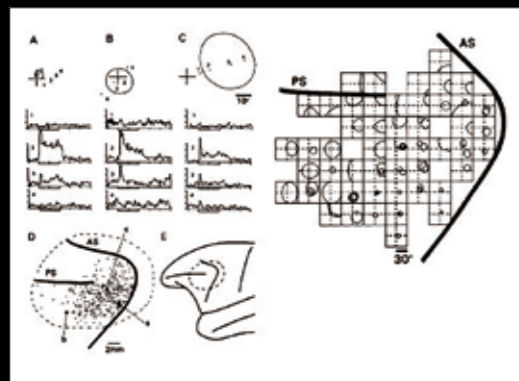


図1 前頭眼野に見られる視覚受容野のトポグラフィー (Suzuki and Azuma, 1983)

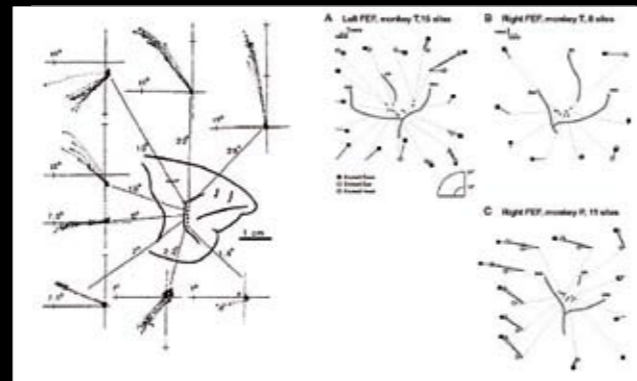


図2 前頭眼野に見られる眼球運動方向のトポグラフィー (Bruce et al., 1985)

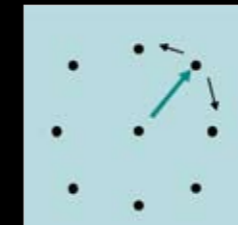


図3 眼球運動課題の様子

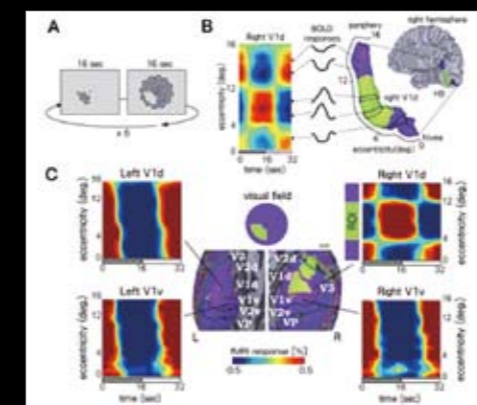


図4 位相符号化解析法の例

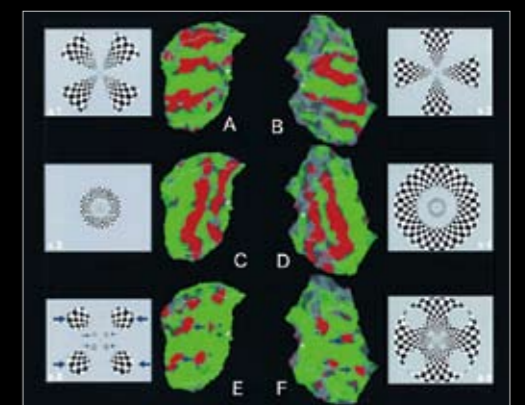


図5 位相符号化法で得られるトポグラフィックマップの例

フィックな表現の有無を検出するため、得られたfMRI信号は「位相符号化解析法」を用いて解析した(図3-5)。また、前頭眼野の位置を他の既知の領域との相対的な位置関係を使って決定する目的で、注視点から周辺の目標位置へ向かう眼球運動をする課題、注視点を見続けるだけの課題、注視点を見ながら人差し指のタッピング運動をする課題、注視点を見ながら舌を左右に動かす課題を交互に行ってもらい、この間の脳活動をfMRIにより計測した。

結果

眼球運動実行時には、上前頭溝と中心前溝の交点付近の皮質で顕著

な脳活動が観察された(図6)。一方、指タッピング課題実行時には前中心回のやや背側部を中心とする領域で、また舌運動時には前中心回の腹側部を中心とする領域で顕著な脳活動が観察された。異なる行動で賦活される脳領域を同一人で比較したところ、それぞれの領域間で重なりはなく、それぞれの活動中心の相対的位置関係に類似が見られ、指運動と舌運動に関与する脳部位をもとに、前頭眼野の位置を推定できることが明らかになった。

また、fMRI信号の位相符号化解析により、前頭眼野では眼球運動方向の違いに応じてシステムティックに変化することが見出された(図6)。ヒトの前頭眼野に

おいても、サルと同様に、視野や眼球運動パラメータに関するトポグラフィックな表象が存在することが明らかになった。

今後の目標

これらの成果を手がかりに、視野の特定の場所に呈示される刺激に対する能動的注意課題、受動的注意課題における前頭眼野の活動の比較から、注意制御に関わる前頭眼野の役割を解析し、意識的にある対象に注意をむけるしくみの解明をめざす。

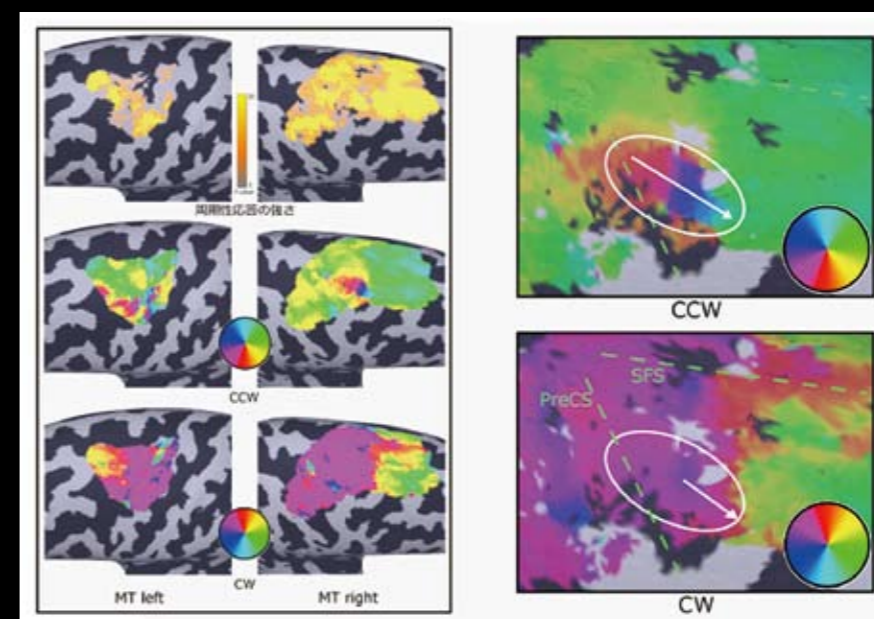


図6 左図 上:眼球運動方向の周期的な変化に対応して活動量が周期的に変化した前頭葉の領域。中:反時計回り方向に眼球運動方向を回転させた時の前頭葉の活動部位の変化の様子。下:時計回り方向に眼球運動方向を回転させた時の前頭葉の活動部位の変化の様子。いずれも右は右半球の、左は左半球の活動を示している。右図 右半球の前頭眼野で観察された眼球運動方向の違いに応じた活動部位の変化。上:反時計回りの運動時。下:時計回りの運動時。

研究プロジェクト

癌患者支援プロジェクト

はじめに

こころの未来研究センターでは、「癌患者支援プロジェクト」を行っている。このプロジェクトは平成19年度より始動されたが、ここでは20年度からこのプロジェクトで行っている重病患者の生きがい調査、「癌患者の首尾一貫感覚 (SOC : Sense of Coherence)」調査についての研究進捗状況を紹介する。

研究プロジェクトの背景
——実践と理論のつながり——

私は長年にわたり、末期患者の研究とカウンセリングを行ってきた。末期患者と対面していると、精神力と身体症状との深いつながりを実感し、心が身体に及ぼす影響について考えずにはいられなかった。

ここに余命を宣告された二人の末期癌患者の例を挙げてみよう。医学的見地からすると、両者の病状はほぼ同じであっても、病への向かい方 (気持ちの持ちよう) は違うのである。一人の患者は、「息子が結婚するまでは」とか、「孫が卒業するまでは」など、何がしかの目標を持っていた。末期状態にあってもこのような目標 (希望) を持つことは、結果として精神力やNK (ナチュラルキラー) 細胞の活性化を促し、医学的予測をはるかに上まわって、生を全うすることもある。もう一人の患者は、既に家族を亡くして、「もう生きる意味がない」と生への目標を失っていた。このような背景から、予後告知を死の宣言として捉え、残された時間の意味を見いだせず、予後告知から十日も経たない内に息を引き

カール・ベッカー (こころの未来研究センター教授)
Carl Becker

取ったケースもある。

これはほんの一例にすぎないが、患者の精神力が余命に影響を及ぼすくらいに、精神と身体は強いつながりを持っている。つまり、「こころ」が、病気からの回復や進行に大きな影響を及ぼしているのである。昔から、「病は気から」と言われる東洋においては、この現象はさほど驚くことでもないであろう。しかしながら、このことを科学的見地から明らかにしようとする試みが始まったのは、ごく最近のことなのである。

精神が身体に与える影響に関する科学的調査法を大きく発展させたのは、40年ほど前に革新的な博士論文を発表したアロン・アントノフスキー (1923-1994) である。彼は優れた論文や著書を数多く発表し (1987)、科学的手法 (統計学的分析) を用いて、病に罹りやすい人とそうでない人の違いを探る研究を重ねた。その結果、センス・オブ・コヒレンス (Sense of Coherence = 「首尾一貫感覚、人生観」以下SOCと略す) という理論を見出した。

病に対する精神力として、アントノフスキーは「人生における意味」を挙げた。「Salutogenesis (健康原因論)」と呼ばれるアントノフスキーの理論は、健康に有益な人生観を「コヒレントな (意味をなす) もの」と名付け、その人生観を形成する要因として次の3つを挙げた。(1) 置かれている状況を理解する能力 (Comprehensibility)、(2) 置かれている状況に対応する能力

(Manageability)、(3) 頑張る意義を見いだす能力 (Meaningfulness) である。これらの要因が強ければ強いほど、病気などに強いということが分かってきたのである。

健康原因論を発表して以来、十数年間にわたり、アントノフスキーとその支持者は主観的尺度 (言語・文化・宗教など) に偏らない科学的測定指数を用い、この理論を実証してきた。北欧をはじめとする福祉国家は、国家医療費削減という観点から、病気の治療よりも、予防に重きを置いている。それゆえ、精神と身体の関係 (= こころ!) が健康に及ぼす影響を明らかにしたアントノフスキーのSOC調査法は、過去20年間、少なくとも400件以上の医学・社会的研究論文に引用され、20万人以上の人に対して行われてきた。わが国における重症患者のケアや予防医療においても、このSOC調査は有益であろうと考えられる。

京都大学こころの未来
研究センターにおける
プロジェクトの試み

先ほど「こころと身体をつながり」について述べたが、筆者の感覚と同じ実感を現場の看護師たちも持っていた。京都大学附属病院では、臨床現場でのケアとケアへの情熱を持つ師長や看護師たちが定期的に夕方勉強会を行ってきた。看護師たちは、患者の精神面が病の治療に留まらず、看護においても大きな影響を



患者とのコミュニケーション

及ぼすことを経験として知っていたが、それを実証する手法を持っておらず、実践における新たなケアとケアの精神支援プログラムを確立するには至っていなかった。勉強会において筆者と共にアントノフスキーのSOC理論を勉強し、看護師たちは臨床現場での実感を科学的根拠に基づいて証明することによって、新たなケア・ケア精神支援プログラムを導入することができるのではないかと仮説を立てた。

この実践現場からの声を基に、こころの未来研究センターでは「癌患者支援プロジェクト」を立ち上げた。現在、このプロジェクトの第1段階として、「癌患者の首尾一貫感覚 (SOC)」に関する疫学研究を開始している。京都大学附属病院内で予備調査的に行われてきた調査は、第二岡本総合病院、三菱京都病院、京都南病院、康生会武田病院、武田病院、計6つの病院の協力を得、本格的な研究に着手した。

本研究の第1の目的は、癌を中心とする重病患者のSOCを調査することによって、精神面の及ぼす影響を探ることである。将来的には、その精神面を支えるための手法を検討し、患者に対する新しいケア・ケアプログラムを構成するとともに、看護師側のストレスやSOCを調査し、看護師側の支援も提言したいと

考えている。

癌の治療過程において、癌患者の多くは、手術や化学療法など身体的負担を強いられ、治療による傷跡などの身体的・社会的・精神的変化を引き受け、ライフスタイルの変容を求められる。これらはストレスを伴い、適応には時間がかかり、時に抑うつ状態などの不適応を起こすこともある。患者によって様々であるが、スムーズに適応できるように早期看護介入を行う必要がある。まず、ストレスを受ける患者の生き方やものの考え方等、個別の要素との関係を明らかにすることはその第一歩であろう。この個別の要素を分析する方法としてSOC調査を使用している。癌患者が困難な状況に適応し、社会復帰を果たすためのケアとケアを考えることがその目的の1つである。既存研究においては、身体的・社会的・精神的変化を余儀なくされ、

新たなライフスタイルの受け入れ困難な患者の解析にはストレス・コーピング理論や危機理論が用いられることが多かった。それに対して、本研究では健康生成論に基づいたSOCに着目し測定することで、患者が持っているストレス対処能力による適応状況の違いを明らかにできると考える。

癌患者の内面を測るという慎重を要する研究であるため、調査の実施にあたり、SOC調査法の理解や内容の精査、倫理委員会の承認といった手続きに長い時間を要した。病棟の激務が終わった後、夜の勉強会に参加して下さる看護師たちの研究に対する忍耐強い姿勢と情熱という強力な支援を得て、数年後には、わが国の医療に対して有益な結果が提唱できると確信している。

本調査に着手して間がないために、結果を示せる段階ではないが、調査を通じて看護師が患者と話し合う時間を増やすことによって、互いの信頼関係が深まり、治療に患者が協力的になったことを報告する看護師もいる。今後の展望としては、個々の患者や看護師に合った具体的な支援策の提言を目指し、さらに研究を重ねて深めたいと思っている。

追加資料

Antonovsky, Aaron. *Unraveling the Mystery of Health*. San Francisco: Jossey Bass, 1987.
C. ベッカー著「SOCの現状とスピリチュアル教育の意味」『全人的医療』(浜松医科大学) 8巻、1号、2007年12月、23-52頁。



研究会

教員が担当する説明会

研究プロジェクト

京都における癒しの伝統とリソース

研究のきっかけと目的

この研究のきっかけは、心理療法において、お寺や神社を訪れたり、祭りに参加したりした体験がしばしば報告され、それが治療において意味があることが多いと感じられたことである。これには二重の問いかけがあると考えられる。1つには、ここを内面としてとらえる心理療法のこころ観の狭さである。これについては、こころ観の問題として追求していく必要がある。もう1つは、京都におけるお寺・神社・祭りなどは、単なる観光や歴史研究の対象ではなくて、今なお多くの人々が心の安定や癒しを求めていく際の重要な仕掛けや儀式を提供していると考えられることである。ただしそれには、現代のわれわれのこころに響きにくくなっている、お寺や神社の、発掘や再発見の作業が必要となろう。

この研究の目的は、主に後者の問題意識にかかわっていて、認知科学、臨床心理学、宗教学などの多角的な視点から京都におけるあまり知られていないお寺・神社・祭りなどに見られる心の癒しの仕掛けを解明すると同時に、それをいわば「臨床の知」として、今なお使えるリソースとして紹介していくことである。

研究の方法と対象

このプロジェクトにおいては、社会学・認知科学などからの基礎的な研究も予定されているが、今までのところは認知科学、臨床心理学、宗教学などからなるチームが自分で対

河合俊雄 (こころの未来研究センター教授)
Toshio Kawai

象となる癒しの仕掛けを主体的に体験し、自分の専門分野から考察するという方法で、7回のフィールドワークを行った。また、閻魔さんや不動明王の眼力に関する認知的研究も計画はされている。

これまで訪れた場所をあげておく。

1. 狸谷山不動院
2. 釘抜地蔵、千本ゑんま堂、船岡山
3. 六道の辻(六道珍皇寺、西福寺、六波羅蜜寺、建仁寺)
4. 嵯峨野(化野念仏寺)
5. 伏見稲荷大社
6. 赤山禅院
7. 御蔭神社、御生山

また、このプロジェクトに関連するフィールドワークとして、8月末には、バリ島における研修・フィールドワー

釘抜地蔵に奉納されている絵馬
(3点とも撮影:和田久士)

狸谷山不動院本殿

クを行い、日本よりももっと宗教儀式が実際の生活に根付いている文化を研究した。

これまでの、フィールドワークの成果は、河合俊雄・鎌田東二『京都の「癒しの道」案内』朝日新書、として、11月に刊行される予定になっている。

フィールドワークの成果

フィールドワークの成果の例として、3つほどあげておきたい。

1. 第1回のフィールドワークは、詩仙堂の奥にある狸谷山を中心とした。特に詩仙堂から上へ上へと、奥へ奥へと進んでいって、元は洞窟の中に置かれていた不動明王に出会い、奥の院としての三十六童子を巡拝するのが印象的であった。
 - ・聖なるものが、上へ上へと、奥へ奥へと求められ、その最内奥に不動明王があるという仕掛けが見事だった。
 - ・三十六童子を巡るのは、その奥に入って、包まれていることと考えられないだろうか。このような山の聖地に対して、海の聖地は、最初から包まれていると考えられる。
 - ・お堂のまわりに置かれた狸の置物が印象的であった。タヌキは元々吃怒鬼で、動物の狸とは関係なかったようだが、それがいつの間にか狸で覆われてしまっている。心や時代の重層性、また動物と癒しの関係も興味深い。奥にビュアに迫るといふのと正反対なような、上に重ねて、増やしていくという癒しの仕掛けもある。
 - ・狸の置物の数、お百度など、数の威

力は興味深い。これについては、認知心理学的にも興味深い。

2. 第2回フィールドワークは、釘抜地蔵と呼ばれている、石像寺、千本ゑんま堂、船岡山を中心とした。
 - ・ここでの聖なるものは、この石像寺のあたりが風葬の地で、この世とあの世の境界と考えられていたことから、「境界」がキーワードと考えられる。
 - ・個々の寺社の検討も大切だが、この世とあの世の境界、鬼門など、京都におけるコスモロジーの大切さを考えさせられた。
 - ・それは同時に、京都の多層的であることを考えさせられる。
 - ・境界がキーワードとなるように、シャーマニズム的な要素が多分に感じられた。釘抜地蔵の元となる話は、痛みに耐えかねていた人が、両手にささっていた釘を抜いてもらうという夢を見て、痛みから解放されたことで、そこから痛みや悩みを

持つ人が、石像寺に願をかけにきて、成就した人のみが絵馬を飾ることになっている。これはイニシエーションの儀式とも考えられ、イニシエーションを受けた人だけが絵馬を飾れるのが印象的である。

・ここではまた癒しの厳しさと慈悲の両面が感じられた。たとえば願の成就した人だけが絵馬を飾れること、閻魔さんの厳しい表情などは厳しい面である。しかし閻魔さんの表情には慈悲の表れがあるように、慈悲の裏打ちがあるのが興味深い。

・ここでもおびたしい絵馬の数など、数の力は感じられた。

3. 伏見稲荷大社

・増殖型の聖地

伏見稲荷では、塚も、鳥居も、どんどんと増えていくのが特徴である。そこには、途方もないパワーが感じられるし、またそれを支え、それに逆に支えられている多くの人々の存在が感じられる。

・向こう側の神

ご神体を見上げる形になっている場所が多いせいか、そこに神がいるのではなく、ご神体の向こう側を目指しているように感じられることが多かった。

このプロジェクトでは、個々の癒しのしかけを、それぞれの研究者が専門領域の知識を生かしつつ、ことばにしていくことで、癒しをより多面的に深く感じられるようにすること、またそれを伝えていくことを目標としている。またここでキーポイントに感じられた、眼力、数、などについて、基礎的研究にも取り組んでいきたい。

伏見稲荷大社…おびたしい数の鳥居が奉納されている

研究プロジェクト

青年期の社会的適応と文化

日本の若者の適応を考える

「最近の日本人の若者はコミュニケーション能力が下がってしまった」「不適応状態にある若者が増えている」ということを耳にすることがある。それは本当のことなのだろうか？ そして本当のことであれば、その背景にはどういった問題があるのだろうか。

こころの未来研究センターでは、平成20年度より青年期における「適応感」についての研究を行っている。

「社会的適応感」とはとても広い概念である。周りの人と楽しく過ごすこと、社会的に受け入れられること、健康で満ち足りた生活を過ごすこと、など、さまざまな状態を適応感に結びつくこととして捉えることができるだろう。このプロジェクトでは、適応感とは何か、そして逆に「不適応感」とは何か、ということをおよそ限定的に定義することなく、さまざまな世代や文化の比較を通じて明らかにすることを目指している。

青年期の人々のこころの問題は、これまで臨床心理学などの個別的アプローチや、社会学や教育学からのマクロのアプローチの双方から考えられてきたことが多かったが、まずはこころと社会のインタラクションを考えるとこころから、この問題に取り組んでいくことはできないだろうかと考えている。

関係性と適応感

私は学生時代から、文化心理学の

内田由紀子 (こころの未来研究センター助教)
Yukiko Uchida

研究テーマとして、幸福感とは何か、ということについての検討を行ってきた。その中で明らかになってきたことは、日本文化の中に暮らす人の中では、幸福感は周囲の人と調和しているという感覚や、周りの人から「助けられている」という認識から得られる部分が多いということである。これは「自尊心を高めること」や「個人的達成を感じることを重視するアメリカの文化の中での幸福感とは異なっている。また、日本では個人的な幸福感をあまり強く感じすぎると周りの人とのバランスが悪くなるのではないかと懸念があることもわかる。つまり、他者から受け入れられ、しかも周囲とのバランスを崩さない、ということが精神的な安定感につながっているということになる。

また、不幸せな状態の時に人々がとりやすい「対処行動」として、アメリカでは怒りを感じてそれを外にぶつけるという「外的な行動化」がみられるが、日本では外的行動化はあまり多くはなく、むしろ自分を責めたり、負い目を感じたりすることから、自己をなんとか改善しようとする「悲しみの内在化」が見られることがわかった。他者を責めるのではなく、自分でいったんいろいろな不幸せの原因を受け止めていこうとするのもある種の関係志向性だが、その後の「自己改善」に向けての原動力の背景にも周囲からのサポートがあると考えられる。

価値観の揺らぎの中で

しかし、「日本人＝関係志向」と単純に言い切れなくなっていることも事実である。対人関係を重視し、周りとの調和を保とうとするのはなかなか一筋縄ではいかない。いろいろなおとこに注意を配分しなければならぬし、時には自分を押しさえないかなければならないこともある。社会的な流動性がだんだん高まっていき、国際社会の中での競争力という概念が重視され、特にアメリカから個人の権利や自由という「個人主義」に関連する概念が入ってくるにつれ、「関係志向性」は大変なわりには個人で獲得できる物事が直接的には多くないように見え、ともすれば疑問が抱かれることもあるだろう。このような価値観の相克の中で、日本社会の中での「適応感」はどのように得られるのだろうか。

研究の手始めとして、平成19年12月、そして平成20年3月に、ワークショップを設けた。主に社会心理学・臨床心理学の国内外の研究者による話題提供を手がかりにして、若者の社会的不適応行動の特徴と、それらに対する教育的・治療的対応の現状、現代日本社会・文化の中にある価値観や行動規範との関連などをめぐって討議がなされた。そこで浮かび上がってきたキーワードは、社会の階層化、自己感覚からの離脱、ある種の「無感情」状態、コミュニケーションの不全である。人から助

けられている、という認識をもつとしても、それをキャッチするアンテナが閉じられてしまっている状態ともいえるだろう。

人とのつながりは「社会的資本」として捉えられることがある。人とのつながりをもつことによって、さまざまな情報が得られたり、困ったときに助けてもらえたりする。しかし人とのつながりは良いことばかりをもたらしてくれるわけではなく、煩わしさをもたらす可能性もあり、さらにはコネクションが何かを進めることの弊害になることもある。関係志向性が大切だ、というだけではなくなくなってしまった文化的価値観の中で、煩わしさなどの「負」の部分に、個人として、さらには社会としてどのように対応するか。日本社会の基盤となっていた「思いやり」や「相手の気持ちを察するコミュニケーション」の在り方を見直すことが1つの糸口になると考えて現在いくつかの実証研究を行っているところである。

比較から見えてくること

こころを考えていく上で、比較に

よる相対化は重要だと私は考えている。そのため、日本と他の国の、20代から40代までの世代の違う人たちや、「大学生」「就業者」「学生でも社会人でもない人たち」での比較も行っている。それぞれの人たちの対人関係の認知、個々人の感情のパターン(安定度)、幸福感、身体健康、对人的効能感などを測定し、現代日本の青年に現れている種々の問題を相対化し、原因解明へのアプローチを行っていきたくて考えている。

今年度の4月にデータ収集を始めたばかりのプロジェクトなので、具体的な結果報告は少し先のことになるが、いくつか見えてきたことがある。それは、大学生と社会人では、同じ20代でも傾向が異なっている、大学生のほうが社会人よりも個人主義的な傾向が強く、他者との関係性のある程度コントロールしたいと考えているということだ。しかし対人関係のコントロールは簡単にできることではないので、その中で傷つくことも多い。アメリカの学生がコントロールを求める傾向は日本の学生に比べるとかなり強いものだが、アメリカではコントロールが「実際にできている」という感

覚を各人がもつような社会的・構造的な仕組みがあるので、アメリカ人の学生は日本人の学生に比べるとコントロールできなかったらといって傷つく可能性は低いようだ。どちらの仕組みが良いとか悪いという問題ではない。ただ、やはり社会の構造と個人の在り方は切り離して考えることが難しいことがよくわかる。

このプロジェクトを実現するために、こころの未来研究センターでは大規模な実験・調査参加者プールを作成し、国際共同研究に関わる海外の研究者の方々に一定期間滞在してもらおうということを行っている。大学生以外のデータの収集のためには、企業、NPO組織などのさまざまな学外の機関のご協力なしには進めることができないが、現在いくつかの機関の皆様へ快くご協力をいただいております。短時間で結果にたどり着けるものではないが、1つの研究として形にすることで感謝の気持ちを示していきたいと考えている。



平成20年3月に開催された第3回ワークショップ

初日に行われた公開ワークショップにおいては、『ひきこもりの国』(光文社、2007年)の著者である、ジャーナリストのマイケル・ジーレンジガー氏、文化心理学の第一人者で、日本の文化とこころの問題について多数の研究を行っているミシガン大学の北山忍氏、当研究センター教授で、近年の若者の自己と対人関係について詳しい、臨床心理学者の河合俊雄氏を講師とし、現代日本の若者のこころのあり方、とくに「ひきこもり」や、対人関係の問題、価値観の揺らぎなどをとりあげた。

戦争と こころ

岡本道雄先生 インタビュー

I n t e r v i e w

聞き手

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)

内田由紀子 (こころの未来研究センター助教)

京都大学元総長で京都大学名誉教授の岡本道雄先生は94歳のいまも哲学書を読み、科学技術文明と人類の将来について考えている。

「人間は大きなこころを持った、共生を本質とする生命体である」と考える岡本先生にお話をうかがった。



哲学を学ぶ

吉川 岡本先生は94歳になられたいまも、多くの本を読み、思索の毎日を送っておられるとうかがい、本当に感銘を受けました。

岡本 私はいままで忙しくて勉強する時間がなかったんですが、2002年、88歳の暮れに左脚の血栓で京大の神経内科へ運ばれ、入院中の骨折もあって3年間入院していました。そのあと家で2年間療養しましたから、5、6年近く入院・療養していたんです。その間に少し暇ができたので、本を読んで、これまでできなかったことを勉強しました。それは3つありました。

その1つは大学紛争です。私は1973年12月から1979年12月まで京都大学の総長を務めました。当時、京大ではまだ大学紛争が続いていました。しかし、私の専門は解剖学で、学生が言っていることの哲学的背景が十分わかりません。それで、この機会に、あそこ学生は何を考え、何を訴えようとしていたのか、その哲学を勉強しようと思ったのです。

もう1つは京都学派。西田幾多郎先生(1870-1945)の西田哲学を一通りは理解しないとイケないと思っております。

そこで、大学紛争については、ドイツのマルクーゼ(Herbert Marcuse 1898-1979)という哲学者を中心に、彼の哲学の基礎と経過を知るために、プラトンの哲学から始め、ヘーゲル、マルクス、ハイデッガー、現存のハーバーマスまで読んできましたが、ここ1、2年は西田哲学を自分なりに勉強しています。

最後の3つめは古い問題ですが、絶えず気にしていることがあるんです。私は総長を辞めてから東京へ行って、中曽根康弘総理が会長の科学技術会議の議員を10年やりました。その当時、皆様ご存じの心臓移植が問題になりました。腎臓移植から始まって、心臓の移植、肺の移植、最後は脳の移植までやろうというような趨勢でした。

それは近代の科学技術文明と人類の将来の問題です。人類はこのまま行っていいのだろうか。これが当時から大きな疑問でした。



こころの未来研究センターへの期待

吉川 去年7月のこころの未来研究センター設立シンポジウムのときに先生が来てくださって、「ぜひがんばっていい研究をするように」と励ましてくださいました。そのころはまだたった4人のスタッフしかなくて、どうなるんだろうと内心、心細く思っていたものですから、本当にうれしかったのです。1年経って、いまようやくスタッフも9名に増え、元気が出てきたところです。

岡本 21世紀は「こころの時代」と言うとき、東洋的というか、日本的というのか、穏やかな柔らかなものを期待しておられると思うんです。こころの未来研究センターでは、そういうものも大切にしながら、こ

ろは人間の特徴なのだから、人間をしっかり見つめることですね。その点、大変大きい目的をもって出発されたんだから、こころからお祝いしたい気持ちでいっぱいです。

吉川 ありがとうございます。科学技術の進歩とこころの問題も大きなテーマになりますし、日本人にとって、たとえば宗教というのはどういう意味があるのかとか、どんなふうにかこころの研究が進めていけるのかとか、いろいろな課題を根本のところから考えていくセンターにしたいと思っています。

岡本 そうですね。いま、おっしゃった宗教はもちろん、教育も人間の問題です。私は日本の大学の研究にはちょっと疑問を持っているんです。いまは主として西洋人の創ったディシプリン(学問分野)にのってその一部を研究するのが日本の大学の研究の主流になっているでしょう。そして、小

さな学位論文をまとめて博士になったらそれで一応研究したという。そういう研究ではだめで、1つの新しいディシプリンを創立するくらいの意気込みで研究することが大切です。

たとえば、病院に行くと医者は私の体を診ません。コンピューターを見て、私のほうをちらちらと見て診察したことにはしているけれど、自分で本当に患者に触らないと、発見とか発明というものはありません。病気の名前でも、パーキンソン、アルツハイマー、欧米人の名前のついたものはいろいろあるけれど、日本人の名前のものはごくわずかです。

何かを発見するには、現物にしっかり触れないとだめなんです。大学というのは本来そういう研究をやる



ところだったんですが、日本は明治維新で欧米の文化を受け入れたときから、外国のディシプリンを取り入れ、それに則った研究をやるのが普通になっている。

こころの研究をやるからには、こころとはなんだろうという根本的な問題にも真正面から当たっていく必要があります。心理学、神経学、認知科学等々、それらの一部分をやって、これがこころの研究です、ということではいけません。粹にはまった研究を繰り返すだけでは大学として惜しい。何かの研究センターを開いたら、1つの目的をもって真正面から当たって20年やってみて、目的が貫徹できなかつたら潰すくらいのつもりでやることです。

なぜ私が西田哲学をやるかといったら、西田先生は日本の哲学をつくらうとしておられた。仏教、禅もやり、西洋哲学、東洋哲学の勉強もして、先生はそれらをアウフヘーベン（止揚）して新しい哲学をつくらうとしておられた。これこそ大学の役割ですから、こころの未来研究センターもそういうところにしっかりと目を向けてほしいと思っています。

平和ボケの学生たち

吉川 先生が総長のころと比べて現在の大学生はいかがでしょうか。

岡本 私は、長く学生と接していませんが、いまは一種の平和ボケだと言われていますね。私が総長のときには、学生はこんなにおとなしいものではなかった。私なんか命懸けていたんです。

1977年6月18日の京大創立80周年記念日に、京大紛争の中心人物竹本の処分を決める評議会を学内で開くことを決意し、その前日、総長として3年ぶりに正式に大学へ帰ってきて、学生と団交を始めました。すると、紙つぶてが飛んでくる。その中には石が入っている。それくらい激しい学生だったんです。私は度胸がないものですから、母の遺骨をお守りに持って行きました。そして、「自分は何も恐れない」と自分に言い聞かせて法経第一教室の教壇に学生部長と2人で上がっていききました。

それに比べると、いまの学生は本当におとなしい。平和だから無理もありません。平和と云って、本当はいまこそ大変なだけども。

人間の実存を家族、国家、世界（人類）と3段階に分けると、いまの学生は、自分の私生活、家族や友人、そういうことばかりに終始していて、国家、世界、人類というようなものに考えが及ばない。人間は一段階上のところに目標を置くと立派にやれるんです。一家族でありながら

国のことも考える。国民でありながら世界のことを考える。

吉川 家族まで考えがおよばまだよいかもしれません。自分、自分という人が多くなってきているように感じますね。

岡本 そうそう、個人主義で、自分のことばかり考えて暮らしているでしょう。私の哲学の第一歩は、人間は独りではない、類的存在であるということをはーゲルから学びました。

それから、大学が法人化して、昔の大学とはずいぶん変わりました。昔の大学はまだドイツの真似をしていましたから、「象牙の塔」みたいなところがあった。一方、学問に対しても戦前は旧制高等学校もあって、哲学にも力を入れていました。

私はいま、人文系の研究者はもっとしっかりしないとイケないと思っています。自然科学のほうは産学協同といって、すぐ実用になるものをやるために一生懸命になっているでしょう。もちろん、それだけではいけません。人文系の人、いま一番われわれに迫っている、社会的、世界的、人類的問題は何かということをしっかり考えて、体を打ちつけるくらいのつもりで思想、哲学をつくらないとイケません。

政治の世界でも、国際会議のまえ、首相や大統領などが2人のみで会うでしょう。そのときに人格が触れ合うんです。西洋では、一般教養の中にギリシャ哲学などが入っている。プラトンを読むと、いま社会で起こっているようなことがみんな書いてあります。その対処の方法まで詳しく。

内田 先生のご著書の中で、プラトン（紀元前427-紀元前347）が親殺しのことを書いているというお話がありました。

岡本 いまと同じで、子殺し、親殺し、みんなある。西洋では一般教育の中で古典を習っています。日本では古典はあるが活かされていない。

人間の教育をしないままで専門教育に入って行く。そして、科学をやり技術をやる。むちゃくちゃなんです。教育改革などで内閣が変わるたびに審議会をつくって対策を講じているだけではだめなんです。日本の教育をいっぺん根本的に考える。明治維新でも外国からのプレッシャーによる開国でしょう。戦後の体制はもちろんアメリカ主導、教育改革はいつも外部のプレッシャーで急いで始めている。

プラトンは「本格的に考えるとは哲学をすることである」と言いました。哲学というのは真剣に考えて、実行に移す前にもう一度立ち止まってしっかり考えて、そして行動する。日本はそのへんが欠けている。これは大変重大な問題だと思っています。

戦争とところ

吉川 先生は、人間のこころについて、どんなふうにお考えでしょうか。

岡本 そもそも、人間がなぜこころを持ったかという、その根本は人間が他の人間と共生するためです。しかし、それと同時に、他の人間と

戦うという戦争と関係があるんです。動物はふつう同種を殺し合いません。生殖のときにちょっと殺し合いをするんですが、本格的な殺し合いはしない。それをするのは人間だけです。ヒトは誕生以来、戦争をして人間になってきました。どうしてこころが発達したかはそれと関係があるらしい。こころがあるから最初は言い合いをする。殴り合いをする。次に武器を使い、死ぬか生きるかだから、考えて考えてどんどん脳が大きくなったのではないのでしょうか。

人間は本来いつでも一生懸命というわけにはいかない。平和なときにははっきりしない。日本では、平和になって武士が戦わなくなっても、こころだけは「武士道」と言って、その道徳を持ちあげている。人間はやっぱり命懸けでないとだめなんです。ソクラテスやプラトンでも、ゲーテでもヘーゲルでも、皆これという仕事をしたのは戦争のときです。その戦争を否定し、共生の方向に導くのが教育です。その大方針を教えるのが宗教です。教育も宗教もあってもなくてもいいものではない。人間にこころがあるかぎり絶対必要なものです。共生そして文化の方向へ。

内田 先生は「人間は大きなこころを持った、共生を本質とする生命体である」と書いておられますね。

岡本 大きなこころを持っていることが人間の特徴なんです。その本質は共生と戦いで、共生は文化の源です。それが同時に戦争への源でもあるのです。

京大の霊長類研究所で、チンパンジーや類人猿などがどこまでこころを持っているかを調べている。その結果、彼らもこころの芽のようなものを持っていることが分かってきました。それでも、人間のこころとは桁が違う。なぜ人間はこんなに大きなこころを持っているのか。それはやはり人間は文化を創り、戦争をするからだだと思います。

私がなぜ戦争に興味を持ったかという、1830年、ナポレオンがワイマールへ攻めてくる。そのとき、ゲーテ（1749-1832）も戦争に行つて負けるんです。その夜、みんながしゅんとしているとき、ゲーテは「諸君、いまここから世界史が始まるんだ」と叫んだ。これは有名な話なんです。戦争をして人間は初めて自分以外の国の国民のことを知るし、これがやがて世界文化の始まりになるという考え方をしている。

ヘーゲル（1770-1831）も同じです。ナポレオンがイェーナに攻めてきて、軍靴の音を聞きながら、『精神の現象学』という彼の終生の名著を書いて、その原稿を出版社へ持って行く。戦争を人間の運命であるように考えていたのです。これで人間の世界が広げられ、「人間は類的存在である」とする彼の『精神の現象学』もこのようなところから生まれたのでしょ。人間と戦争はずっとこうして続いてきて、いまもどこかでやっているでしょう。

人間はふだんは穏やかにしていても、いざとなったら殺し合いをする。それは決して珍しいことではない。人間の本性の中には恐ろしいものがあるということを見無視してはいけな

この出発から共生の方向へいくのが文化の芽です。

これも霊長研の諸君が詳しく調べています。感謝の気持ちがあると、チンパンジーでも親が他から攻撃されるとちゃんと守るらしい。動物にも愛されれば返す気持ちはあります。人間は母親から愛されて、感謝する気持ちがどんどん発展していく。これが人間です。そして、人間の存在は孤独ではないんだと気づく。ヘーゲルの『精神の現象学』は、「人間は類的存在だ、独りではない」と言います。

人間がこころを持ち始めたのはまだ500万年前のことです。生命が生まれた38億年前から今日までを1年とすると、人間がこころを持ったのは昨晚の12時ちょっと前。だから、人類はまだ若いと思いたい。それで失敗もするけれど、よく反省して、立ち直らないといけません。ゲーテも、ヘーゲルもそのような路を歩んだのです。

哲学というのは人間が悲しんだときに強くなる。西田哲学がやっぱり悲しみの哲学で、西田幾多郎先生の私生活は恐るべきものです。奥さんを亡くして、お嬢ちゃんがほとんど全部亡くなる。そして、ご自分が生き残って、それをじっと耐えておられる。その悲しみからあの哲学が生まれた。

人間はこころを持つ。そして、人間には残虐な本性がある。これは否定できない。しかし、その反対の共生を目標にして文化をつくる。人間とは何だというときに、そういうところから出発していくわけです。教育、宗教、こころを持っていなければ、こういうものは成り立たない。こころを持っているということは大きいですね。フォイエルバッハ(Ludwig Andreas Feuerbach 1804-1872)のDie unvergängliche Jugend der Menschheit(人類の不滅の青春)を信じましょう。

人間は類的存在

岡本 しかし、本来人間は独りではない。ヒトはオギャアと生まれてお母さん^{おちんちん}と対したときに初めて人間になります。そのときにお母さんは本能的に子どもを愛する。その愛情が、子どもの親への感謝の気持ちに伸びていくか、単に可愛がられて終わりが問題です。



ヘーゲル

西田幾多郎
(提供:石川県西田幾多郎記念哲学館)

い。これはあなたがたのほうが専門ですね。

しかし、日本は不戦の憲法をつくりました。不戦というのは人類の理想です。共生と戦いをいっしょにもつことを本質にした、大きなこころを持つことができるのが人間なのです。だから、「人間は大きなこころを持った、共生を本質とするべき生命体である」という定義から出発せよというのが私の主張なんです。

共生へ導くのが人間教育

吉川 日本人の宗教についてはどうお考えでしょうか。

岡本 私は特に信仰はないんですが、ヘーゲルの『精神の現象学』を読んでから、人間は類的存在だということを考えて、いまは自と他というものにあまり区別を感じません。だれにでも親愛な気持ちを持っています。

問題はやっぱりこころなんです。こころは自由で、どの方向へでも行ける。だから、人間のこころは悪魔でもあるし、天使でもある。その自由なこころ、闘争本能を持った人間を、いままでの経験によって、共生のほうへ導いてやるのが人間教育であると私は思います。

そんなことで、私はこころの未来研究センターは大変期待するところが大きいんです。

吉川 学問に携わる者は、まず哲学的な考え方をきちんと学ばなければいけませんね。

岡本 哲学はやらないといけません。ヘーゲルやカントを読むのも、彼らの頭の使い方を習うためなんです。

私がこころの未来研究センターへの期待が大きいのは、次のような理由もあります。

先に私は戦争とこころということをお申しましたが、それにはもう1つ大きな歴史物語があるのです。しかも私たちに近い歴史です。それは1932年、国際連盟はアインシュタイン(Albert Einstein, 1879-1955)に向けて、「あなたの、人類のため

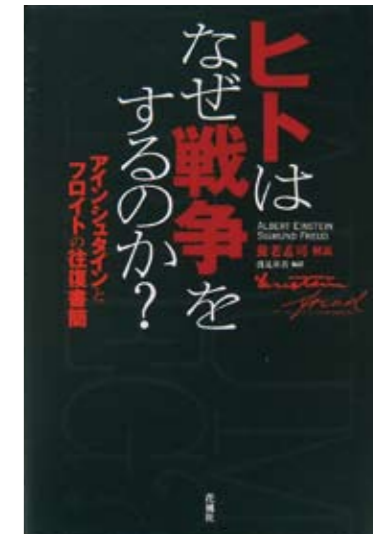
の一番大きな問題は何ですか。そして、そのあなたの質問は誰に聞きたいですか」という内容の親書を出しました。アインシュタインの質問は「ヒトはなぜ戦争をするか」であり、彼の選んだ相手はジークムント・フロイト(Sigmund Freud,

1856-1939)でありました。アインシュタインは人類の知の峯として、戦争について考え得るあらゆる原因を網羅しています。これに対してフロイトは、彼の知識の限りを尽くして応えていますが、何といたってその中心は彼の心理学、性の衝動と破壊、死への衝動を問題として、人間のこころの存在の根本に立ち返って、文化と戦争の関係を論じています。その結論は、簡単な1行、「人間文化の発展を促せば、戦争は終焉へ向けて歩み出すことができる」(Alles, was die Kulturentwicklung fördert, arbeitet auch gegen den Krieg.)のみでした。この結論に達するまでに、フロイトは文明がエロスの衝動を抑圧することと、死の衝動が内化して少子化になることを挙げています。このことを考えると、フロイトの最後の1行の返答は、恐るべき人間の未来をも予言するものでした。

はじめ私は、この問題を取り上げて、こころの専門家である皆様と今後の議論を期待しましたが、まず原書(『ヒトはなぜ戦争をするのか?』浅見昇吾訳、2000年、花風社)を読んでいただいた後にしようかと考えるに至りました。しかし、私の余生も短いので、賢明な諸君の奮起を切に願っています。それは、こころの未来研究センターの課題がいかに広く、深いものであるかを示しています。これがわたしの、こころの未来研究センターへの熱い願いです。**内田** またぜひお話をうかがう機会をつくっていただければ幸いです。**吉川** 先生の期待をしっかりと胸に刻んで、真剣に取り組みたいと思います。**岡本** いつの日か再び会いましょう。その時は、できることなら私はアインシュタインにさせていただき、そして皆様は多くのフロイトとなって答えてください。では、またお目にかかりましょう。**吉川** はい、先生にいただいた大き

な宿題に対する私たちの答えを聞いていただき、先生と議論できるようになる日まで、ぜひ、お元気でいらしてください。今日は長時間、本当にありがとうございました。

(2008年6月16日、日独文化研究所にて)

「ヒトはなぜ戦争をするのか?」表紙
アインシュタインとフロイトの往復書簡

岡本道雄(おかもと・みちお)

1913年、京都府舞鶴市生まれ。京都帝国大学医学部卒業。同大学院特別研究生修了(脳神経解剖学)。京都大学総長、科学技術会議議員、臨時教育審議会会長、医道審議会会長、財団法人稲盛財団会長などを歴任。現在、京都大学名誉教授、日独文化研究所理事・所長などを務める。勲一等旭日大綬章受章。ドイツ連邦共和国功労勲章大功労十字星章受章。

認知科学からこころの発達を探る

十一元三 Motomi Toichi
(京都大学大学院医学研究科教授)

1 記憶研究

私たちが行っている心理学的研究の1つに、記憶を中心にした認知検査を用いるものがある。記憶は私たちにとって最も重要で根本的な認知機能の1つであるが、記憶と聞けばすぐに「暗記」を連想してしまい、面白くない領域と思われがちである。しかし、記憶という現象は、実に多種多様な認知処理から構成されており、私たちの日常的な精神活動で記憶と無縁なものを探すのは難しいと言ってよいくらい、ヒトの活動の大半に関与している。例えば、自転車に乗れる(手続き記憶)、話を全部聞かなくても内容が分かる(意味記憶)、登山すると忘れていた記憶が戻る(ムード一致性効果)などはすべて記憶の性質と密接に関連した現象である。

ここでは、自閉性障害(自閉症)の人の認知機能を調べた記憶研究の例を紹介する。自閉性障害の人はコミュニケーションを苦手とする反面、暗記やカレンダー計算(年月日から即座に曜日をいい当てる)などに秀でた人が多い。ところが、いろいろな方法で調べられてきたものの、すぐれた記憶がどのようにして生じているのかは不明であった。そこで、「処理水準検査」というやり方で記憶の特徴を調べた。

同じ「りんご」という文字を見た時でも、どのように眺めるかで記憶のされ方が違ってくるとい現象は有名である。例えば、「平かなで書いてある」(かな処理)、「最後が“ご”で終わっている」(音処理)、「果物である」(意味処理)などの眺め方(つまり異なるタイプの認知処理)を比べると、私たちは意味処理をした時が

最も「りんご」をよく覚える(処理水準効果)。これは、私たちが何か文章を読んだ時、文の意味が頭に残るが、文章に出てきた語の発音や、漢字やカナの使い方はあまり頭にのこらないのが常であるが、これも処理水準効果の表れである。そこで、単語をみてもう前に、まず「次のことは食べ物ですか?」のような質問をしてから、「りんご」などの単語を呈示する検査を行った。こうすることにより、単語の眺め方を予めコントロールできる。このやり方でたくさん単語を見てもらったあと、単語の記憶成績を調べた結果が図1である。

図1を見ると、自閉症の人とそうでない一般の人との相異は明らかである。対照群では、単語をみる前に受けた質問の種類により記憶成績は大きく変化している。そして、単語の意味を尋ねられた場合に、その単語を最もよく覚えている(処理水準効果がある)ことが分かる。一方、自閉症群は質問の種類によってほとんど記憶が影響を受けていない。どの質問にも正しく答えているので、単語の認知処理は質問によって変化していたことになる。それにもかかわらず、記憶成績は変化していない(処理水準効果がない)。ここに自閉症の記憶の謎を解く大きな鍵がある。すなわち、意味を手がかりにすると言葉を覚えやすいという一般的な様式とは異なる認知処理を、自閉症の人は行っていることを示唆している。さらに、ことばの表記(片仮名、平仮名)に注目した時の記憶は、一般の人を上回っていることが注目される。

2 ストレスに対する自律神経活動の研究

人間の身体は常に精神状態の影響を受けて変化している。そのため、

ヒトの精神状態は、脳波などの脳活動だけでなく、心臓(拍動)、皮膚(発汗や電気活動)、瞳孔(直径)、呼吸(大きさや回数)、腸(消化管運動)などにもよく反映されている。中でも特に心臓、皮膚、瞳孔などは敏感に精神状態に反応している。

ご存じのように、心臓の拍動は交感神経(運動や緊張により活動)と副交感神経(リラックスにより活動)の両方の支配を受けて活動が変化している。そのため、心拍を分析することで、自律神経の活動を推測することができる(図2)。私たちは、簡便な装置で心拍を測定することで、さまざまな精神状態下での自律神経系の活動を調べた研究を行っている。その一例を紹介する。

私たちは、何もしない安静状態と比べ、運動をしている時にはリラックスの程度(リラクセーション)は低下している。このような時には、交感神経の活動は増大し、副交感神経の活動は低下する。計算問題をしている時には、体に負荷はかからないものの、精神的なストレスとして作用する。しかし、同じ計算を行っている場合でも、ストレスのかかり方は個人の特性によって異なるかも知れない。自閉症の人とそうでない人々を対象に、精神ストレスとして連続引き算課題を行った時の心拍を調べた研究がある。両群ともに、暗算では交感神経の活動に変化は生じなかった。一方、一般群の全員が暗算により副交感神経の活動が低下したのに対して、自閉症群の半数で副交感神経の活動が増大した(図3)。つまり、暗算という精神作業により、自閉症の人は通常とは反対にリラクセーションが増す人がいることを意味している。このことは、ストレス反応を始めとする自閉症の人の心理特性(精神生理)を理解するうえで重要である。

3 感情に関する研究

ヒトの感情に関する研究が近年、急速に発展している。中でも、表情を用いた研究は比較的古くから行われており、最近では機能的MRIなどを用いて脳活動との関係を調べたものが少なくない。私たちは、発達障害群(アスペルガー障害をもつ人)と一般群に対して、コンピューターの画面上で表情を呈示し、近赤外線分光測定(NIRS:図4)を用いて、表情を観察中における前頭葉(背外側前頭前野:思考と密接に関連する部位)の脳血流(酸素化ヘモグロビン濃度)を調べた。人間は、強い表情(怒りなど)を観察した場合には、大脳辺縁系だけでなく前頭前野の一部も活動することが知られている。

その結果、一般群では、怒りの表情をみた時に前頭葉は活動するが、それ以外の表情ではほとんど反応はみられなかった。一方、発達障害群ではどの表情に対しても前頭葉はほとんど反応しなかった。同時に行った質問(その表情が好きか嫌い)に対しても、一般群では「喜び」の表情を好み、「怒り」の表情を嫌う傾向が明らかであったが、発達障害群では、どちらの表情とも「好きでも嫌いでもない」(平均値)という結果であった。両群とも表情の種類は正しく見分けていたことより、発達障害群では、表情の認知はできているものの、その主観的受け取り方(表情を見ている人に与える影響)は一般群と異なっていることが示唆される。

以上のように、認知心理学、電気生理学、脳機能画像などを組み合わせて用いることにより、人間の認知機能やその発達の解明を目指している。

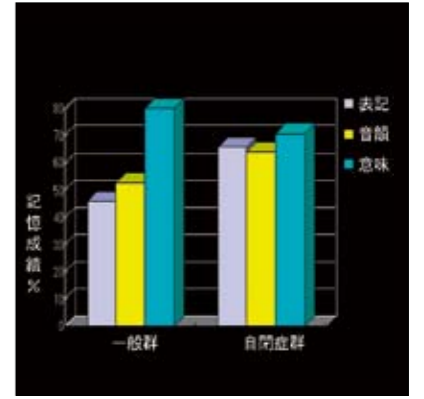


図1

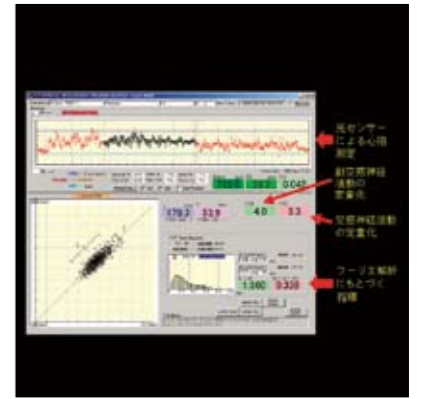


図2

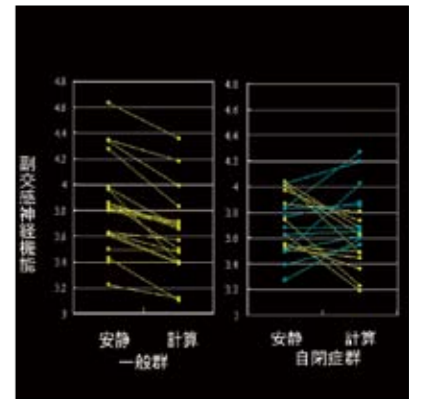


図3

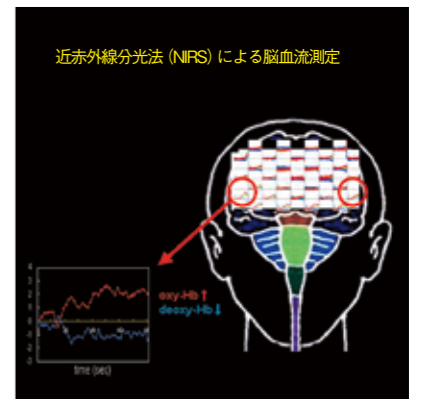


図4

脳機能画像とこころ

福山秀直 Hidenao Fukuyama
 (京都大学医学研究科附属高次脳機能総合研究センター教授)

きなくなることはなく、指先などの精緻な運動ができなくなるにすぎない。運動の麻痺を生じるのは、もう少し大脳深部や脳幹といわれる部位の障害で起きることが多い。それでは、「大脳はなにをしているのか？」というと、一般的なたとえは難しいが、司令塔のような機能と考えるのが、適当ではないかと思われる。特に、人が人たる所以である、さまざまな感情、思考、推論などは、大脳の前半部、特に、前方の前頭前野と言われる部分で行われていると考えられている。神経機構をさまざまな動物の発生から考えると、ある条件に対して、適切と思われる行動をとるための臓器で、そのために必要な、反射的運動や経験を記憶するということが、最初の機能として存在していたと思われる。その機能が徐々に発達し、現在の人類の脳になったと考えるのが、一番合理的な考え方ではないかと推測する。それでは、「こころ」は、どのような機能を意味するかという点から、本論を始めたい。

はじめに

こころが体のどの臓器に存在するか、長い人類の歴史においては、さまざまな考え方があったが、現在、こころの存在は、多くの人が脳にあると考えるようになってきた。「それでは、脳はなにをしているのか？」という問いに、現在でも、はっきりした答えを用意することは困難である。よくわかっていることは、運動、感覚などの処理をしているところであるということであるが、たとえば、純粋に大脳皮質の運動を司る、運動野の障害では、まったく運動で

こころの機能

こころと書く場合と心と書く場合で、日本人の受ける印象が異なる。英語でも mind という場合と heart という場合で感じ方が異なる。特に、heart は心臓も表す言葉であり、こころが心臓にあるという考えが色濃く残った言葉である。いずれの場合も、こころを物質と関連しない人特有の感覚と考えると、デカルトの二元論的になってしまうが、現在の脳科学研究をもとに考えると、本来のこころは、heart ではなく、mind であり、その機能を解明することで、こころ

の解明が進むと期待される。

本論では、こころを論ずるのではなく、脳の機能、特に、近年、進歩が著しい脳機能画像法を用いて、こころを研究した成果をまとめて、こころの理解の一助になるようにしたい。したがって、こころを二元論と考えると話が進まないの、哲学的な論考は別にして、こころの科学的根拠について、わかっていること、わからないことを、明らかにする。

脳機能画像法

脳の断層画像がX線を使って撮像されるようになったのは、1970年代の前半のことで、まだ、40年未満の歳月しか経過していないが、その間に、脳の形態、血流、代謝、神経伝達物質やその受容体、神経繊維のつながり、などが、脳全体をカバーするような画像として見るようになった。その歴史は、X線CTにはじまり、ポジトロン断層法(PET)、磁気共鳴画像法(MRI)などの開発と、高速なコンピュータの開発によるところが大きい。これらの画像法の詳細は、それぞれの参考書を参照していただきたい。

こころの機能画像

MRIを用いると、現在、1秒間に10から20スライスの画像を撮像する手法が開発されている。この方法を用いると、画像をいわゆる「パラパラマンガ」のように脳の活動の変化を追うように撮像でき、脳のどの部位が、特定の課題を行っている間に活動しているかを見ることが可能になっている。この方法を機能的MRI(fMRI)と呼ぶ。

われわれが、こころの研究で考案した課題をfMRIで検討した結果の一部を紹介する。これは、こころの機能の中でも、もっとも重要な愛

情、親しみを感じる場合に脳活動がどうなっているかを、研究したものである。実験方法の詳細は、参考文献1を参照されたい。図1に方法の概略を示した。MRIスキャナーの中で、それぞれの絵を見ながら、反応ボタンを押すという課題である。

われわれが考案したのは、愛犬家が、自分の愛犬を見た場合と、他の犬を見た場合を比較して、脳の反応部位がどのように異なるかをみて、愛情を感じる部位を確認することを目的とした。対照として、人の顔を見て、家族と見知った人の顔を見せることにした。家族と愛犬を見た場合、図2に示すように、大脳内側面の下部に、家族、愛犬を見た場合に反応する部位が確認された。これまでの種々の研究でも、前帯状回の周辺にこのような感情的な反応を示す部位があることがわかっている。1人1人のデータでは、確実なデータが出ない場合が多いので、10人から20人の被験者について、同様の検査を行い、画素ごとに統計計算をして、有意な部位のみを脳全体から選びだして、脳の部位を示したのが、図2である。

これらのデータと、これまでの、病気や事故で脳の同じような部位に損傷を受けた人の行動の変化とを比較検討して、脳の機能がどこにあるか、こころの機能のある場所はどこかを、1つ1つ明らかにしているのが現状である。

感情や喜び、報酬という比較的動物にも見られるような機能は、大脳深部にあることが多く、必ずしも、大脳皮質、特に、前頭部などが行っている機能ではない。これは、報酬系という、なにかを儲けるという感情は、人だけではなく、動物にもある感情で、たとえば、犬でも、えさを与える場合、しっぽを振って、寄ってくるなどの行動を示す。このような機能は、ドパミンというアミノ酸



図1:課題と提示方法
 上の図は、家族、犬を、知っている、知らないにわけた。
 下の図は、実際に、MRIスキャナーの中で、被験者に見せたものを、順番に並べたもの。

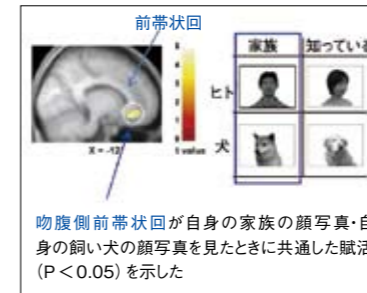


図2:近親感のある人、犬で、反応する部位

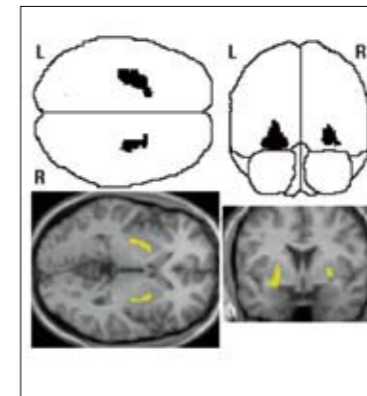


図3:テレビゲームと報酬
 テレビゲームで、ランクが上がると、報酬がもらえるという課題で、大脳基底核底部のドパミンが放出されているということを示したもの。(参考文献2より)



図4:感情、認知、行動に関わる脳
 (参考文献3より)

の一部が関与して、大脳基底核の底部で、反応がみられることが知られている(図3)。

このような、こころの研究は、さまざまな分野で行われており、広くは、精神神経疾患の病態の解明や、犯罪心理の研究、また、経済取引の時の心理的な反応を予測する方法など、多方面に応用され始めている。日本では、まだ十分に認知されていないが、これからの重要な研究分野である。

おわりに

こころ、あるいは、感情、認知など、人の高次の脳機能に関する研究は、fMRIにより、さまざまな方面から研究がおこなわれ、これまで、サルでしか知り得なかった所見が人で直接画像としてとらえられるようになった(図4)。今後、さらに詳細な研究がおこなわれて、脳機能の解明が進むことが期待される。

1つ、重要な注意点としては、研究で得られた結果をどのような面に使うかという、倫理(神経倫理、あるいは、脳倫理)に関する基本的な考え方を研究者がきちんと持つことである。科学は最終的には、人の幸福につながる研究を行う必要がある。

参考文献

- Shinozaki J, Hanakawa T, Fukuyama H, "Heterospecific and conspecific social cognition in the anterior cingulate cortex," *Neuroreport* 2007;18:993-997.
- Koepp MJ, Gunn RN, Lawrence AD, Cunningham VJ, Dagher A, Jones T, Brooks DJ, Bench CJ, Grasby PM, "Evidence for striatal dopamine release during a video game," *Nature* 1998;393:266-268.
- Dolan RJ, "Emotion, Cognition, and Behavior," *Science* 2002;298:1191-1194.

座談会

こころと日本文化

日本文化においてこころはどのように捉えられてきたか。宗教学者の山折哲雄先生をお招きし、古代から現代まで、その有り様を語り合う。

山折哲雄 (国際日本文化研究センター名誉教授)

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)

カール・ベッカー (こころの未来研究センター教授)

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)

「心」の日本思想史

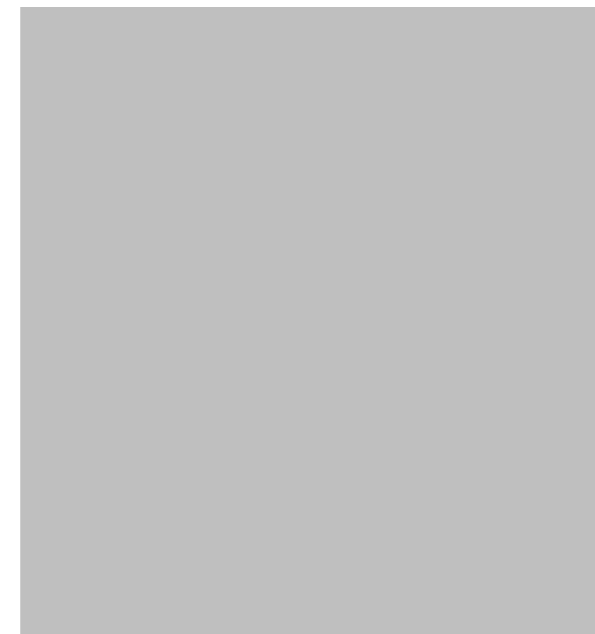
山折 日本で「心の時代」とか「心が大事である」と言われ出したのは20～30年前、1980年代前後からですね。新聞などのメディアで「心、心」と言い始めた。

少し歴史を振り返ってみると、「心」という言葉は非常に古い時代から使われていました。しかも多義的な意味で使われてきたということがわかってきて、これはやはり深い根っこがあると思うようになりました。大ざっぱに言うと、記紀、万葉の時代からすでに使われている。仏教が入ってくる前は、神道的な世界で「清き明き心」といって非常に大事にされていた。清い心、明るい心ですね。

戦前は、「清き明き心」は日本人の道德心とか倫理観の基礎を成していると説かれていました。その一種の反動で、戦後民主主義の時代はこの言葉はあまり使われないような傾向がありました。それが30年ぐらい前から意識されるようになったのは、やっぱりそれが大事なんじゃないかと再認識され、戦後民主主義の反省の上に立って「心」というタームが再登場してきたような気が私はします。

それでは、仏教が入ってきてから神道的な心の問題がどう展開をしたのかが気になって、その系統だけ調べてみました。代表的な人物を挙げると、まず最澄です。最澄の作品の中で一番重要なキーワードは「道心」です。「道心」というのは仏の道を求める心、一種の求道心です。

同時代の空海の代表的な作品に『十住心論』という著作があります。「十住心」というのは、人間の心には、動物的な段階の心から、世間的な心、倫理的な心、小乗仏教的な心、大乘仏教的な心、大乘仏教でも最高の真言密教の心ということで、十段階ある。これはまるでヘーゲルの精神現象学だなど思いましたが、そういう人間の心の内容を成熟の度合いにしたがって分類する体系的な思考はすでに空海の段階で行われていた。



最澄 (伝教大師坐像 重要文化財 鎌倉時代 伊富貴山観音護国寺蔵) と最澄筆「天台法華宗年分縁起」(部分 国宝 平安時代 延暦寺蔵)。「天台法華宗年分縁起」には「道心」の文字が見える

空海 (弘法大師像〈談義本尊〉・部分 重要文化財 鎌倉時代 東寺蔵 写真:便利堂)



親鸞 (安城御影・部分 重要文化財 鎌倉時代 真宗大谷派蔵)



法然 (法然上人御影〈隆信〉・部分 南北朝時代 知恩院蔵)

その影響はインド仏教の段階からあるわけです。

私は、日本の仏教は、平安時代の山の仏教から初めて日本人のものになったと考えているので、外来の仏教が日本化し、日本文化の中に土着していく過程で、心が思考の対象になってきたのだと感じたんです。そのキーパーソンが、空海、最澄である。

その場合、もちろん以前の神道的な「清き明き心」を踏まえて、一種の重層化が行われている。日文研 (国際日本文化研究センター) の共同研究などをやっていく過程で、次第にそんなふうになるようになりました。

中世、鎌倉時代の展開

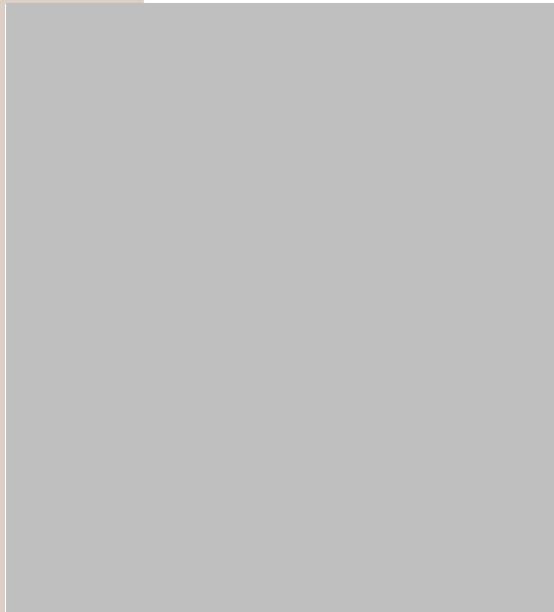
それが中世、鎌倉時代にどういうふう展開したか。法然、親鸞が「深信」ということを言います。「二種深信」という言葉がある。人間は非常に罪深い存在であるということに信ずる心が第1番目の「深信」で、もう1つは、罪深い存在だからこそ阿弥陀如来によって救済されるということで、逆転の救済の論理みたいなものが主張されている。2種類の「深信」の「信」は「信心」のことです。「信心」は日本語として非常に大事な言葉だと思います。それを信仰の論理で定義したのが法然と親鸞だったのだと思います。

ところが、それを明恵が批判するのです。法然のいう念仏の心、信心は、最澄以来の道を求める菩提心、つまり仏道を求める心とは違うと。仏道を求めるということは、激しい修行をして仏になっていくということです。これには修行が絶対に必要だという考えが前提になるのですが、法然と親鸞は、修行は重要じゃない、阿弥陀如来に対する信心こそが大事なんだと言った。「菩提心」が大事だと言う明恵に対して親鸞が反論したのが『教行信証』だと思います。この三者の論争の中で信心の問題が深められていきます。

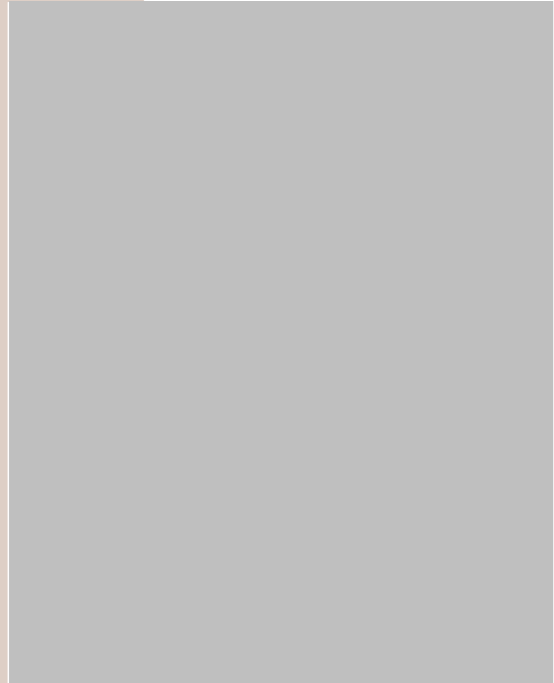
ところで、同時代の道元は「身心脱落」ということを言います。中国に行って如浄について座禅を続けているうちに、ある朝、ぱっと悟りを開く。自分の体と心が一体になり透明になっている。それは「身心脱落」である、とわかったようなわからんような言葉ですけど、そういうことを言う。

これが、その後の日本の禅の伝統のいわばキーワードになっている。ここで初めて、心と体は一体のものだという考え方が体験に基づいて論理化されていくのです。

記紀・万葉時代には、人間が死ぬと、心が体から離れて魂となって天上に昇っていくという考えがあった。だから、「清き明き心」は心身分離の考え方にもとづいていたということになります。



明恵(明恵上人樹上坐禅像・部分 国宝 高山寺蔵)



道元(道元禅師観月の像・部分 鎌倉時代 宝慶寺蔵)

仏教が入ってくると、そうではない、心と体は一体のものだと説く。人間の体の隅々に心が宿っていると考える。だから、日本人は臓器移植に対して非常に敏感に反応して拒否するわけです。臓器には心が宿っているものだから、部分的な器官として扱うことはできないというのが仏教的な心身一体の考え方です。だけど、古代万葉人が現代に生き返ったら、魂の行方だけが大事だったわけですから、後に残された遺体はいくらでも差し上げると言うでしょう。日本人が臓器移植に対してふっ切れない態度をとるのは、そういう心身

論に深いかかわりがある。その場面で心という問題が重層化しているわけです。体と離れるのか、体と一体のものなのか。これを非常に明快な形で主張したのが道元の「身心脱落」だと思います。

それと同じ考え方は明恵にもあります。明恵の「夢記」は河合隼雄さんが詳しく論じて夢分析をされているんですが、あの夢の中に、非常に印象的な言葉が出てきます。それは「身心凝念」という言葉です。「凝念」というのは、じっと瞑想を深めていくと心と体が一体化する。それは一種の夢幻の境地と似ていると言っている。道元の悟りの体験と明恵の悟りの体験とは限りなく近いんです。

そういうふうを考えてくると、8世紀の平安時代から中世鎌倉期に至る日本の仏教のリーダーたちは、ずっと心の探求を主要な主題にしてきたということが、私なりに見えてきました。こここのところは、従来の仏教史研究、思想史研究の中であまり問題にされなかったことではないかという気がします。

心を美的にとらえた世阿弥

心の探求の伝統が芸術的、美的な感覚のレベルで洗練されたのが、15世紀の世阿弥の段階だと思います。ご承知のように「初心忘るべからず」の「初心」という言葉があります。世阿弥は「初心」という言葉をいろいろな著作で使っているんで、非常に多義的です。「初心」は、実は仏教の経典の中に、月の満ち欠けとの関係で出てきていて、新月の段階が「初心」なんです。

「初心」という言葉は、確か空海も使っていたと思います。だけど、空海の場合、「初心」は「十住心」の中で比喩的に使われているだけでした。それを正面に据え、日本人の自然観、美意識、信仰心と密接不可分のものとしてとらえて、美しい言葉に移し替えた最初の人世阿弥ではないでしょうか。15世紀は、日本人の心の問題追求において革命的な変化が起こった時代ではないかと思っています。

そこから、われわれが今日使っているさまざまな心の多義的な使い方に枝分かれしていく。その1つとして「心・技・体」なんていう言葉が近世になって出てくる。あの出発点はやはり世阿弥であるし、もちろんその前には仏教リーダーたちの探求の歴史があるわけです。「心」と「体」と「技」は一体のものだという考え方は、武道、芸道、それから普通の生活上の指針として使われるようになる。

そういう伝統があるんですが、では、その心をどういうふうにして成熟させるか、どうしたら心を純化させることができるかというのは、実は主体的な意味で

は大きな問題だったわけです。

一方では、『源氏物語』以降、人間の心は非常に汚いものだという認識が深められていきます。人間の心はいかに汚くて、埃にまみれていて、敵意、殺意に満ちているかをとことん追求したのが紫式部です。そういう伝統から、「私心」「執心」「妬心」のように、心のマイナスの面を「心」という言葉にくっつけて表現することが行われてきたのです。

悪意、敵意、嫉妬心、私心などに転落しかねない心を浄化するために、仏教徒たちは修行ということを思いついたのだらうし、それで信仰を深めようと考えた。これにたいして、あるいは、世阿弥は感動という要素をそこに持ち込む。自然との共鳴、共感の中で、次第に自分自身の利己的な関心を洗い流し、芸の力でコントロールしていく。

心は変化する

そういうさまざまな議論を読んできると、日本人は、心は変化するものだ、あるいは、心は成熟するものだと考えていたということがわかってくる。それが、心に対する日本文化の基本的な考え方ではないかという気がします。浄化する努力を怠ると、いつでも悪しき心、禍々しい心に転落する危険性をもっている。それをわれわれは「心の闇」などと表現しています。

何の文献かは忘れたんですが、フロイドが、精神分析は50歳くらいになった人間にはあまり効果がないということを言っているんです。人間のエゴの中核に、ある変化を与えることができるのは40代か50代までだと。

インド仏教もそういう問題を考えていたのではないかと思います。エゴ、自我、自己は、徹底的にコントロールしないと、あるいは、外面的、内面的な力をそこに加えないとなかなか変化させることができない。変化させるのはものすごく困難な仕事であると。だからこそ、インド仏教では「無我」ということを言うわけです。我をとことん否定しようとする。そのために修行を積み重ね、難行苦行をやる。

ただ、日本人は、自我をそういうふう徹底的にコントロールすることなんかできない、という判断を最初からしていたのではないかと。それに代わって、心は浄化し、成熟させることはできると考えた。だから私には、「心」と「我」という二元対立の構図が背後に見えてくる。

近代になって、われわれは西洋の心理学やフロイド的な自我の考え方を受け入れて、それを日本人の精神治療に応用しようとしたんですが、我とか自己にかんし



山折 哲雄(やまおり・てつお)

1931年生まれ。専攻は宗教史、思想史。日本を代表する宗教学者の一人。国際日本文化研究センター元所長・名誉教授、国立歴史民俗博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。著書に『人間蓮如』『日本仏教思想論序説』『日本人の靈魂観』『道元』『雲と肉』『坐』の文化論』『宗教的人間』『神と仏』『日本のころ、日本人のころ』『親鸞の浄土』『信ずる宗教、感ずる宗教』ほか多数。

てはアングロサクソン流の考え方を前提にしていた。しかし、西洋の人々の考え方と日本人とは違う。日本でフロイド心理学があまり振るわないでユング心理学が受け入れられているのは、そのへんに関係があるのではないかという気がします。

心をめぐる日本の戦後史

鎌田 今、山折さんから、心の日本思想史、心の比較文化論という観点から、かなり大きなスケールの話が提示されました。それについて、もう少し細かく話をしていきたいと思います。

最初に、「心」が問題になるような時代がいつ頃かといったときに、1980年代、あるいはそれ以前から起こったんだろうと言われたんですが、それについて、少し私も考えていることがあります。

60年代は肉体の時代、あるいは、暴力・ゲバルトの時代だった。例えば、唐十郎の状況劇場とか、土方巽の暗黒舞踏とか出てきて、「肉体の再発見」がテーマとなった。

ところが、70年代には、1972年の連合赤軍浅間山荘事件とかいろんなことがあって、政治の挫折があった。その後、70年代の後半に「精神世界」という言葉が広がっていった、次の展開として、密教、ヨガ、またそれ以前から関心をもたれていた禅やさまざまな瞑想や身体技法が注目されるようになり、「精神世界から心の時代へ」という大きな流れが生まれた。それまで



吉川左紀子



カール・ベッカー



鎌田東二

貧・病・争が宗教を生み出すきっかけであったけれども、「精神世界や心の時代」の特徴として、生きがい、生きる価値の探求、生活の質(QOL)といったことが考えられるようになった。それが80年代以降です。

そういう心を意識するような時代の中で、日本の文化を見直していく時に1987年に国際日本文化研究センターが設立され、また、教団の活動として新新宗教とか第三次宗教といわれるようなものが生まれて若者たちを吸収していった。それがやがて1995年のオウム真理教事件につながってゆく。

こういう心をめぐる日本の戦後史があると思うんですが、ベッカーさんは宗教学の立場から、どういう観点を持っていますか。

ベッカー お言葉を受けてお答えしますと、宗教は従来、貧しき者の拠り所で、貧・病・争に対して希望を与えるものとされてきました。しかし日本が80年代のバブル期に入ると、貧しさも争いもあまり感じず、物質的には非常に豊かになりました。その反面、いったい何を求めているのだろうか、何のために生きているのだろうか、という実存的な問いを、地位の高い知識人や僧侶のみならず、一般の日本人までも考えるようになってまいりました。

生きる意味、価値、目的は何なのか、これは目に見える問題ではなく、考えるもの・感じるものでした。武道や修行、夢や心の探求によって何か新しいもの、潜在的なものを見つけだそうとする運動が、確かに80年代あたりからさかんになったと思います。そのことと、先ほど山折先生に語っていただいた、心の浄化や修行という流れについて考えたいですね。

鎌田 そこに入る前に、同じ時代に心理学ではどんな流れがあるのか。例えば、さっきフロイドの問題が出ました。また、日本でユングが目目される背景の話が出ました。また、今や心理学ブームで、人文科学の中で一番人気がある学部・学科は、心理学部・心理学科であったりします。そういうふうに変換していく

流れの中で、心理学はどのように心を見つめてきたのでしょうか。

心理学が見つめてきた心

吉川 私が心理学の勉強を始めたのは1970年代ですが、「心とは何か」といったような問いについて、真剣に議論していたといった記憶はあまりないですね。京大を含めてほしい総合大学では、心理学を教える先生はいろいろな学部に分散している。それが意味で象徴的だと思うんですが、それぞれの研究者がいろいろなディシプリンで、心の働きの一部、一面に焦点をあてて研究をしている。なので、「心とは何か」とか心理学の心観のようなことについて真剣に議論し出すと、取捨がつかなくなるということなんじゃないでしょうか。

当時も今もそうですが、たとえば京大では、心理学の研究室は文学部、教育学部、教養部(現総合人間学部)に分かれていて、私が学生の頃、文学部では、動物を使った行動実験や知覚の研究が「心理学」でしたし、教育学部では、知能検査の標準化といったことが「心理学」でした。当時教育学部におられた河合隼雄先生の臨床心理学の講義が学生の間では大人気で、文学部の学生だった私もそれを聞きにいていましたが、「同じ心理学でもずいぶん違うなあ……」と。すべてに共通する「心」の概念はあるのかどうかといったことを考える以前に、なぜそれらが全部「心理学」という同じ名前でもくられるのかも、よくわからなかったような気がします。

1970~80年代は、情報処理心理学、認知心理学といったコンピュータ・サイエンスの影響を受けた心理学が非常に進んできました。人間の心の働きをコンピュータの情報処理になぞらえて理解するという形の心理学が1つの大きな流れになってきたんです。そうすると、情報処理モデルを使った実証科学的な心理学と、臨床

心理学のような、クライアントの心とどう向き合うか、といったことを考える心理学との間の溝は、ますます広がる一方、という感じでしたね。

ところが1990年代以後になって、脳科学、神経科学が心理学に非常に大きな影響を及ぼすようになってきて、それまでばらばらだった心理学の様相が少し変わってきました。動物の行動を左右するのも脳の働きですし、知覚、記憶、思考のような人の認知のプロセスも、うつや不安を抱える人の心の動きも、本を正せば脳の働きに行き着くところがあるわけです。脳科学と心理学がつながることで、人の心の科学的なとらえ方にある方向が見えてきました。それまでは、私の頭の中では、認知科学と臨床心理学は、どちらも心の学問という言い方はできるけれども、どう考えても両者を結びつける道筋がない状態でした。脳という媒介を介して心の働きについて考えることで、動物の心と人間の心のつながり、人間の心の中にある意識できる心と意識できない心の関係などが、わかりやすくなってきたと思います。

これからはさらに、仏教や神道の世界で考えられてきた「心」と、脳科学の立場から見えてくる「心」とがどう結びつけられるのか、ということ、心理学者が考えることができるようになっていくんじゃないかと思っています。

鎌田 それが、「こころの未来研究センター」ができあがる背景ですね。80年代から90年代にかけて国際日本文化研究センターが華々しく活動し展開して、初代の梅原猛さんは日本古代学を柱にし、その次に河合隼雄さんが日本人の心と文化をテーマにし、そして山折哲雄さんが3代目所長になって、日本人の信心とか、心をどう浄化あるいは鎮魂することができるかというさらに深い宗教思想や民俗事象の方向へと問題意識が推移してきたのかなと思っています。

心身関連の秘密

山折 私は38歳のときに胃潰瘍の再発で入院して1週間ほど絶食体験をしたんです。そのとき、3、4日ぐらいいまはものすごい飢餓感に襲われた。もちろん点滴で栄養を摂っていますが、体全体は枯れ木のようになっていった。すると、不思議なことに、5、6日目から飢餓感がすーっと引いてきたんです。そして五感が非常に鋭くなってきた。かえって生命力が賦活してきたという感じがしたんです。

私はそのとき初めて、人間の体には一種の逆説的なエネルギーと言ったらいいのか、矛盾する働きがあると思ったんです。栄養摂取をする身体という観点から

すれば、限りなく死に近づいているにもかかわらず、生きようとするエネルギーが逆に燃えさかってくる、そういうことを体験しました。

退院して、やがて東北大学の宗教学科の助教授になったんですが、そのときの体験が気になっておりましたら、医学部の心療内科の鈴木仁一先生という方と知り合った。この人は禅をやっている方なんですが、心身の疾患のある人たちに絶食療法を指導していたんです。その人が言うには、何科に行っても治らない患者が自分のところに全部来る、それに対して絶食療法をやるんだよと。

東北大学の医学部では戦前から絶食療法をやっている、特にヒステリー治療に大きな効果を発揮したという伝統があるんです。ヒステリー患者の多くの患者さんを絶食療法で治した。これは医療史の中でちゃんと記録されている治療法で、それを受け継がれていたわけです。

絶食療法をやるきっかけは人によって違う。意思堅固な人には非常に効果的なんだけれども、あまり意思の強くない人にはそれほど効かない。だけど、宗教伝統の身体技法の中には、心身関係の病気で苦しんでいる人を癒す秘密がたくさん隠されている。そういうことを前提にしていたわけです。

私は1カ月間その心療内科に通って、先生がどういう聞き取りと治療をするのか、観察をさせてもらった。私にはその時の体験が非常に大きくて、それから人間の体は心身論としてとらえることができるんだと思うようになった。1970年代あたりかな、体から心へというものの考え方の転換期だと思いますが、ものすごい数の心身関係の文献があらわれるようになった。その中でベッカーさんとも知り合うわけです。

ところが、日本の医学界において、心療内科はいつも継子扱いなんですね。だから鈴木先生は経験も豊富な人なんですが、その正規のポストは助教授どまりでした。京都大学はどうですか。

吉川 心療内科それ自体ないと思いますね。

山折 それはまた大変な問題ですね。

鎌田 日本で心療内科の概念と科をつくったのは九州大学の池見西次郎先生ですね。

山折 私もそのころいっしょの共同研究に参加したことがあります。そういうものがベースになっていて、それで医学と宗教も手を結ばなければいけないと思うようになった。

鎌田 身体と心、そして医療。その医学・医療はどういうふうに関心して、変えていくことができるのか、問題を解決していくことができるのか。まさにかつて宗教はそういう技法でもあったわけだから、当然、現代の

医療や医学の問題意識と密接に結びつくはずで。

山折 後になって河合さんとお目にかかるようになって、それにかんするいろんなものがつながるようになりました。河合さん自身がずっと明恵の研究をやっていました。そういう点で、日文研は私にとって非常に貴重なものを考える場でした。

ベッカー なぜ絶食が効果をもたらすのでしょうか。

山折 お釈迦さんは悟りを開く前の6年間、断食をやっている。聖書によるとイエス・キリストも40日間飲まず食わずで砂漠をさまよっている。イスラムにはラマダーン(断食月)がある。世界の普遍宗教のリーダーたちが宗教的真理に到達するにあたって、食を断つという経験をしていた。これは偶然なのか、そこに普遍的な意味があるのか、という人類史的な問題になってきます。

この問題はおそらく今日の拒食とか、過食、そして引きこもりの問題と深いかかわりがあるにちがいない。ただ、これをそういう宗教的な断食の伝統とどう結びつけて解決させるか、第三の道が見つけれられるかどうかですが、なかなかわかりません。

鎌田 私は、大学4年生の頃、1週間断食を2回したことがあるんです。水も飲まない。渋谷の大学に通いながらやったら、3日目ぐらいに心臓に激痛が走って、本当に死にかけた。そのとき、自分にとって新しい発見だったのは、体の苦しさとか渴きとかあって、体が1日1日、動けなくなっていく。渋谷まで通うのに、階段を上がるだけで心臓がぜいぜいする。人にぶつかるようによろよろする。腰に力が入らない。真っすぐ立つだけでも相当なエネルギーが必要なんです。そうすると、腰が落ちてくる。体の形、動きがまさにお年寄りの姿形になっていくんです。私は20歳ぐらいの若者であるけれども、動きそのものはまったく老人の格好なんです。そのとき、この文明社会がいかに老人、妊婦、病気の者に優しくないつくりになっているかとか、年老いていくとき体が変化することが心にどういう作用をするかといったことに気づかされました。

断食の終わりの日に近づいたころには、気みたいなのを感じ始めまして、気というのがこの世界にあって、その気を食べることができることがわかった。というのは、若い人たちが幸せそうに食べたり話をしていっているのを見てだけで、こちらのほうに気というしかなんかが注入されて、私は何も食べていないけど、元気になるんですよ。ところが、荒々しく言い争ったりしているのを見ると、自分の中のエネルギーがますます枯渇して、もう近づきたくない、見たくないという状態になる。

だから、気みたいなのは確実にこの世界に存在し

ていて、それを取り入れることができたのが仙人だ。仙人はこの世に実在する。仙人になる修行は可能だと確信したんです。そこで、仏教や神道や中国のさまざまな思想に関心を持って研究するようになりましたが、いわゆる修行者になって、修行の道で生きるところへは行かず、研究者になった。でも、自分にとっては心と体と、その次の次元、気や魂という次元に至る扉を感じたことがありました。

創造的病

山折 ユング派の心理学者が言ったことでしたか、病気には2種類あるという。1つは普通の病気ですが、もう1つは「創造的な病」、クリエイティブ・イルネス(creative illness)であると。その創造的病って何だろう。病気をすることによって、一種の精神の成熟を手に入れることができる、そういう病気があるんだということのようです。器質的な病気の場合は、なかなかそうはいかないかもしれませんが、そういうもう1つの病いというのが確かにある。それを具体的に修行の場で検証してみると、そこから断食体験といったものでてくるのかなと思った。それから、私の友人で50代の働き盛りにガンになって亡くなっているのが3人いるんです。最末期になって、その3人が3人とも本当に穏やかな翁のような表情をしていたことが印象にのこっています。

いま鎌田さんが言ったように、老人に近づいていくというのは成熟のプロセスをあらわしているのかもしれない。それが表情に現れる。もちろんガンになって地獄の苦しみのなかで亡くなっていく方も多いのかもしれませんが、私の友人の場合、3人とも翁の表情をしていた。すごい葛藤の中で精神のクリエイティブな変化を経験することができたのかなとそのとき思ったのです。

ベッカー 苦しみの中でも、なおかつ意味を見つけることが大事だと思うのです。私が看っていた患者さんには、末期の人であれば、治る見込みのある患者さんもいたのですが、病気を単なる邪魔、超えたい悪としか思えない人は、そこから何も学び取れずに、「なぜこういう経験をしなければいけないのか」と嘆くだけで、すごく不満がつる。それに対して、病気から学ぶ人もいる。クリエイティブ・イルネスとは限らないのですが、日本文化でも他の文化でも、病気は単なる邪魔ではなく、天から何かを学び取るべき啓示という側面を持っていると思われていました。その天からの啓示を学ぶことができれば、単に喪失や苦しみがあっただけではなく、自分の生き方について何かを学べた、と

言えるようになってくる。そうすると別の意味で納得できるのです。

鎌田 私が断食をやったとき、本当に死ぬかもしれないと思った。ここでやめるか続行するか決断を迫られますよね。そのときに、どんなことがあっても受け入れようみたいな、諦めというか、一線を越える瞬間みたいなのがあったと思うんです。

だから、50代でガンになって末期の状態になったとき、どこかの時点で、現実そのものを受け入れるという瞬間があったと思います。そうしたときに、楽になっていくとか、転換が起こるのかなと推測するんですけど。

ベッカー そもそも、何を目指して、水も飲まないで1週間断食したのですか。

鎌田 それは悟りを求めてなんです。70年代はさまざまな活動があって、政治的なところに行く人もいれば、禅とかヨガに行く人もいました。私は演劇とかいろんなことをやっていたんですが、哲学科の学生だったということもあって、物の本質みたいなものを自力で自分の体験の中からつかみたいというのがあって、その1つが断食だったんです。

ベッカー 断食にはいろんな作法が必要ですね。

鎌田 断食は大変危険です。だから、それ以来、学生には危険なことはするものではないと、自分の身で体験して言えるようになりました。でも、あるリスクを伴いつつ、境界というのか、ここまで行ったら何かが変わる、危ないということがはっきり見えてくるということも言えます。

無私と無心

山折 そのぎりぎりのところの、ある意識的な状態を、昔の人は「無私」と言ったんだろうと私は思うんです。「無私」というのは、心を限りなく無の状態に近づけることではないかと解釈したんです。それは、心を限りなく

浄化するということでもある。心にはそもそも、成熟する可能性があるから、その心をそのような方向にコントロールしようとした。日本人はこの「無私」という言葉が好きなんです。

鎌田 「無私」という言葉は、だれがキーワードのようにして使い始めたんですか。

山折 無私・無心というのは、だれがということではなくて、一種の大衆道徳としていつの間にか広まっていた。それを、近代になって意識的に使ったのが夏目漱石でしょうか。漱石の「則天去私」の「去私」は「無私」のことだと思うんです。どういうわけか漱石は「去私」という言葉を使った。ところが、漱石研究者は、ほとんどが漱石の「則天去私」という境地は理想として掲げられただけであって、漱石自身はそこまで行っていないと考えている。『門』という小説の中で言うように、自分は山門のところまでは来る。しかし、その門を潜ることはできない、その場にたたずんでいだけの寂しい男なんだ、と主人公に言わせています。

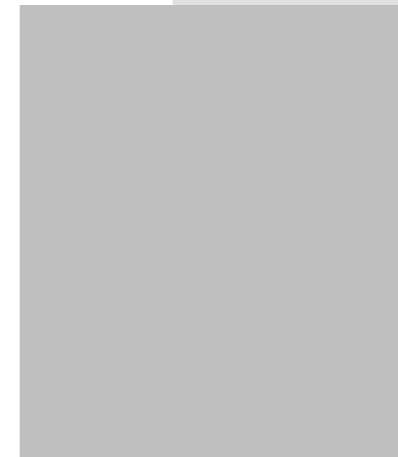
それとこの「去私」をどう結びつけるかということなんです。

江藤淳の漱石論までずっとそのような考え方で来ているような気がするんだけど、晩年の漱石の生活を子細に見ていくと、最晩年に書いているのは『道草』、そして中断したのが『明暗』です。『明暗』を書いているころの漱石は、午前中執筆しているんです。だから、午前中は小説家として近代的自我と格闘し、胃をきりきりもみ上げるような苦しみの中で書いていた。ところが午後になるとその仕事からは一切離れて、俳句を作ったり、詩を書いたり、絵を描いたりしている。芸術の世界、美の世界に遊んでいる、そしてそのときが自分の生活の中で一番自由になって解放されるときだといっている。

その気持ちがああの「則天去私」の言葉に表れていると私は思う。それは理想的な境地かもしれないけれど、最晩年の午後の時間は、実際にその境地を手にしてたかもしれないですね。だけど、また翌日になると



夏目漱石



小林秀雄 (提供:新潮社)

書かなきゃならない。その葛藤の中であの「則天去私」という言葉が出てくる。ものすごく切実な言葉だと思います。「私」をどうして去ったらいいか。執筆者としては、去れるわけがないのです。

小林秀雄が好きな言葉は「無私」でした。『無私の精神』という本まで出している。小林秀雄における「無私」は、できるだけ私を無に近づけるときに初めて深い批評ができる。「私」がそこに混じり込んでいるうちはきちんとした批評はできないという認識からきている。一方で、自己を離れて、いったいどうして批評ができるのかという問題が出てくるわけだけれども。

小林は、例えば風呂呂に入って、刀の鑢をじっと見ていると、つまり無私の状態になっているとその本当の価値がみえてくるというわけです。こういう感覚は近代になって初めて出てきたものではない。小林は一面で近代精神の権化みたいな人なだけけれども、それはやっぱり日本文化の深い伝統の中からくみ取ってきた態度だと思う。

漱石が「去私」と言い、小林秀雄が「無私」と言う。これだけ近代的自我を追求し抜いた典型的な男たちがそういうことを言っている。この逆説をどう受け取るか。そういうことは、文学批評とか宗教研究、あるいは思想研究の中で、あまり追究されてこなかったような気がするんです。

鎌田 私は、歌は日本人の心をめぐる一番主要な表現だったと思うんです。伝統的には歌で表すことが一番多かった。『万葉集』『古今集』『新古今集』などの歌が生まれてくる中で、中世に「和歌即陀羅尼」とか「和歌即真言」という考え方ができてきた。これは、西行をはしりとして、無住、正徹、心敬といった人たちが展開していきます。

「和歌即陀羅尼」では、歌を詠むのは1首1首真言陀羅尼を唱えることにほかならないと考えます。だから、1つの仏像をつくっていくように歌をつくるんだという。まさに彫刻陀羅尼を表現した円空が出てくる時代のはしりです。心から出てくるものが真言陀羅尼として歌の中に表出されるというあの時代の精神が、日本における無私・無心の具体的な表現のはしりだったんじゃないかと思うんです。

善悪を呑み込む「無」

山折 人間の体のリズムと自然のリズムがぱっと合うときに詩歌が生まれる。だから、無私・無心の「無」は、自然との共鳴、共感という感覚と非常に深い結びつきがあると思うんです。漱石の場合は、そこに近づきたいと思うから、そこで絵や書が生まれる。そのときに

純粹の批評が生まれるというのが小林秀雄です。

無私・無心の「無」は非常に大きな問題だなと思うんです。これはおそらくアングロサクソンの文化の伝統にはないと思います。彼らの文化では「無」はニヒリズムに行ってしまうというところがあって……。

ベッカー ネオプラトニストのプロティヌスからトマスや中世哲学までのヴィア・ネガティヴァ (Via Negativa) という伝統もありますが。

山折 それはないとは言えないけれど、日本人の「無」に対する関心の深さは特筆すべきものがある。例えば、われわれはよく汝の宗教は何だと問われて、「無宗教」と言うんですが、これは必ずしも宗教がないということではなくて、「日本人には無の宗教がある」ということだと私は解釈しています。

「無」という言葉を聞くと、みんな心に響くものがある。一時代前には、どの家庭に行っても座敷の床の間に掛け軸がかかっている、「無」「無一物中無尽蔵」なんて書いてある。政治家や企業人のオフィスに行きますと、やっぱりお坊さんの書いた「無」とかの色紙が飾られている。

鈴木大拙は東洋の無の思想というようなことを言うし、それは西田幾多郎の「絶対無」まで行ってしまうわけです。「無」は善と悪を超えるものと言われるけれども、善悪のレベルを溶解してしまっているところがある。悪の問題を主体的に日本の思想史の中でとらえた人間は親鸞なんです。親鸞が提起した悪の問題はその後ずっと流産していった。主体的にそれをとらえる者はほとんど1人もいなかったようです。

だから、倫理的、道徳的な問題を考える場合にきわめて重要な善と悪の問題が全部無の中に解消されてしまった。踏みとどまったのは親鸞だけだったという気がします。

それが行き着くところまで行き着いたのが西田哲学です。ここは京都大学なので特に言っておきたいのですが、西田さんは『善の研究』で出発します。『善の研究』は西田哲学の最高峰の1つだと思うぐらい私は好きな作品なんです。あの中で悪の問題はほとんど論じられていない。善を論じて悪が論じられないっていったい何だろう。ずっと西田哲学を追いかけていくと、最後まで悪の研究はない。結局、善悪を飲み込む絶対無というところに行ってしまうわけです。

人間の心の内部に潜んでいるはずの善と悪の問題が、無という問題で解消されていくという長い歴史が存在していた。無を大事にするということ、これが非常に重要な考え方だとした場合、無心、無私と言い続けてきた日本人とはいったい何か。日本人の心に対する考え方って何だろうと考えると、わかったようなわ

からないような話になってくるんですね。

吉川 ある種の理想像としての無ということでしょうか。山折さんは、先ほど心の成熟とか純化ということをおっしゃっていましたが。

山折 成熟していくと、最後はやっぱり無心、無私の状態になりたいと思うようになるんでしょうね。1つの理想像でしょう。そのとき人間が大きくなる。そういう人間こそ立派な政治が行えるはずだ、というような認識にもつながっていく。

心の表面の部分と底の部分

吉川 喜怒哀楽の感情も、感情が揺り動かされるとき、心は動揺しますよね。それを平静な状態に保つ仕掛けのようなものが心の中にあって、いろいろなつらい経験をしたときに、ゼロのポイントというか、変わらずに中間のところにとどまっている状態、ある種暖かくも冷たくもない、一番体にぴったり合ったところできっとあるというのが……。

山折 まさに「平常心」ということなんでしょうね。喜怒哀楽の中間的なところでとどまる。阪神淡路大震災にしても中越地震にしても、被災者の方々の表情が非常に穏やかなんです。あれこそまさに平常心ですね。今度の中国の大地震でも、アメリカのハリケーンの時でも、インドネシア沖の大地震の場合でも、現地における被災者の方々の表情は、怒りと悲しみと苦しみとが前面に表出している。前から気になっているんですが、日本人のあの表情の穏やかさとはものすごい対称性がある。これは偶然ではない。やっぱり日本人のある信仰、自然観と深いかわりがあるのではないかと思うんです。その自然観の最も基底に流れているのは無常感だろうと思いますね。

吉川 ある出来事に対して、感情が怒りに向かうのか悲しみに向かうのか、その境界の在処に関心があります。天災に遭遇してしまった場合も、多くの日本人の感情は怒りの方向よりも悲しみの方向に向かいますね。

ベッカー それは非常に代表的だと私も思うのですが、ただし、最近の若い日本人はかなり西洋化して、怒りが少しずつ見えてきているような気がします。

吉川 それは私も感じる場合があります。ただ、最近の若い日本人でも、伝統的なものの見方、感じ方のようなものが何かの拍子にぱっと表にでてくるのがあって、はっとさせられます。先日、センターの助教の内田さんと話をしていたときに、おもしろい話を聞きました。彼女がアメリカに留学していたとき、何人かの日本人と、巨木が生えている森を歩いたそうです。

そのとき、誰かが「こんな木を見たら、しめ縄を飾りたくなるよね」と言い、皆が本当にそうだねと共感した、というのです。アメリカの森でしめ縄を思い浮かべる、というところに、日本人だなあ、と感じます。

もうひとつの例ですが、私は北海道生まれで、仏教や神道に関わる伝統的な習慣やしきたりはほとんど知らずに育ちました。京都の通りや路地にたくさんあるお地蔵さんに、毎日水やお花が供えられているのを見て感心し、私のゼミの院生に、「京都の人は、本当にお地蔵さんを大事にしているんだね」というような話をしたら、「先生、それは違いますよ。お地蔵さんを大事にしているのではないです。お地蔵さんが私たちを見守ってくれているから、お礼に行っているんです」と言われたんです。

京都で育った学生や院生たちとしゃべっていたとき、そんなふうに言われたんですね。そのときまで、私は、若い人の中には伝統文化や宗教に対する感性は

阪神淡路大震災で無事を喜び合う高校生 (提供:毎日新聞社)



京都のあちこちにあるお地蔵さん

ずいぶん醒めていると思っていたんですが、意外にそうではないのかもしれない、と思いました。「先生、お地蔵さんをそんなふうに見たら困ります」と私はたしなめられてしまいました(笑)。

人の心は、海の底と海の表面のようなもので、表面的な部分はいろんなことで変化しているように見えるけれども、底の部分はあまり変わっていないのかなと、そのとき思いました。

平常心・怒り・悲しみ

鎌田 いいお話ですね。今の話につながるかもしれないんですが、日本の神話に、アマテラス大御神とスサノオノミコトのやり取りの中で、アマテラスが天の岩戸に籠るといふ神話がある。それは、引きこもりと関係するようなことを言う人もいますけれども、それとは別に、このスサノオとアマテラスはある種のタイプというか、心理的な元型として考えることもできると思うんです。

スサノオは、ある出来事があると、それが怒りに外化され、さまざまな暴力的な振るまいをしてしまう。そういう振るまいを見たお姉さんのアマテラスは、怒りをもってそれに対するんじゃないかと、悲しんで、岩戸に籠ってしまう。なぜか悲しみが籠りになっていく。今、話を聞きながら、日本人の心の中に、悲しみがある行為や構造を形づくるような何かがあって、それが神話のこの2人のやり取りの中で表現されているのかもしれないと思ったんです。歌なども、多くは悲しみから始まります。

ちなみに、スサノオは、先ほど山折さんが言われた清き明き心があるかどうかを疑われたことから怒って

暴力を振るい、アマテラスはその暴力に対して悲しみをもって籠った。そういうことから高天原を追放されたスサノオノミコトは、ヤマタノオロチという怪物を退治して、命を助けたその土地の娘と結婚するんですが、「あが心すがすがし」、私の心はすがすがしいと言って歌を詠む。その歌が「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」という、日本で最も古い歌になったという物語が『古事記』の中で語られています。

そこに日本人の心をめぐる表出のありようが神話的な形で表現されていると思います。それが今日まで、1つの文化装置というのか、文化元型、心理元型として底流しているんじゃないか。

ベッカー 悲しみに転じるか怒りに転じるかは、相手を人間と思うか大自然と思うかで異なってくると思います。自分に対して人間が何か悪いことをした場合、本能的に怒ってしまうのはわかりますが、地震・津波などの天災や、老・病・死などに対しては、いくら怒ったって、虚しいばかりですね。

古くから、地震や津波のような天災もありましたし、飢饉などで自分の子どもを間引きせざるを得ないような苦悩もありました。そういうときは、怒っても仕方がなかったので、悲しむ方向、自我を控える方向に働いていたと思うのです。そういう意味では、怒りに行かず悲しみに行く日本文化の方向が、西洋より成熟したものを見方のように見えます。

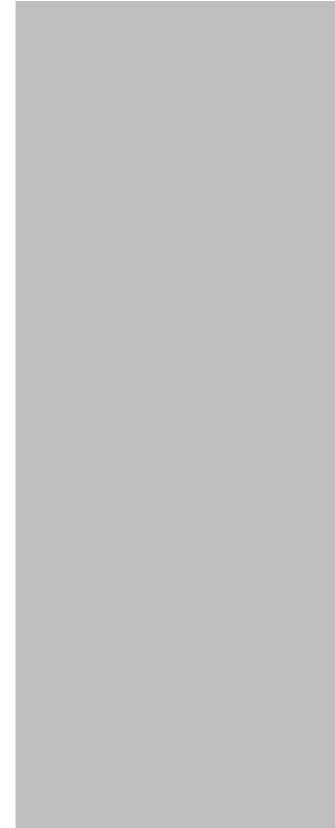
鎌田 いろいろな要素があると思うんですが、日本人は自然界のさまざまな振る舞いを、何かの祟りだと受け止めていく志向性を保持してきた。それは、自然そのものが怒りをもって現れていると受け止めることによって、より慎ましい謙虚な生き方をするとか、畏怖や畏敬の心をもつとか、究極的には生かされて生きていることに感謝するというようになっていくんでしょう。祟りというのも、心とか日本の文化を考えていく上で非常に重要なポイントだと思います。

吉川 それは自然からの祟りという考え方でしょうか？

鎌田 自然からもそうだし、生き霊、さまざまな霊、死者からの祟りもあります。まさに山折さんが研究してきたことの1つは、祟りと鎮魂の文化装置の問題ですね。

山折 悲しみについて言えば、『万葉集』で「恋」という言葉に「孤悲」という漢字をあてています。「孤」と「悲」しみて「恋」を表現する。恋という感情は悲しみを伴うものだという認識が万葉のころからずっとあるということです。

それは、仏教の「慈悲」という考え方と対応するわ



『万葉集』で「恋」という言葉に「孤悲」という漢字をあてた例
(『万葉集』近衛本 京都大学附属図書館蔵)

は大きな断絶があるということです。だけど、あれはわれわれの世界観じゃないですね。死は断絶ではない。別の世界に移行していくことでもある。その移行していくときの感情の重要な役割として、悲しみをむしろポジティブに考えてきた伝統がある。だけど、キューブラー・ロスさんの5段階説では、「悲しみ」というのは「怒り」から「悲しみ」へというプロセスの中ででてくる。その違いが大きいなと思います。

鎌田 『平家物語』の基調は「無常」と「悲」だと思うんです。社会学者の見田宗介さんが、西洋文明の一番根本には原罪意識がある、日本の文化の中には原恩意識があると書いています。「恩」を感じる。私は「原恩」に寄り添う形で「原悲」の心がある、感謝することと悲しむことが抱き合わせのようなものとしてあるんじゃないかと思うんです。

山折 私はミケランジェロのピエタをバチカンに行ってみました。あれはまさに悲しみの聖母なんですね。愛の聖母じゃなくて、愛と切り離された悲しみの聖母。だから、ラファエロの聖母とはまるで対極的なんです。キリスト教文明では「愛」と「悲」は二元的な存在なのだと思った。それをわれわれはいっしょのもの、切り離せないものだと認識してきた。

鎌田 「慈悲」という、まさにそれが融合した形で意識

で、「慈しみ」の気持ちは仏教的な「愛」だけれども、それは「悲しい」ことでもあるんだという認識です。この「悲」は人間の感情の中で、要の位置を占めていたのではないかという気がします。

そういうふうになると、例えば、キューブラー・ロスさんの死を受容するまでの5段階説がありますね。初め拒否し、やがて怒り、悲しみの段階がきて、諦めと受容とすすむ。その上で、最後にデカセクシスということをいっている。死ぬことと生きることとのあいだに

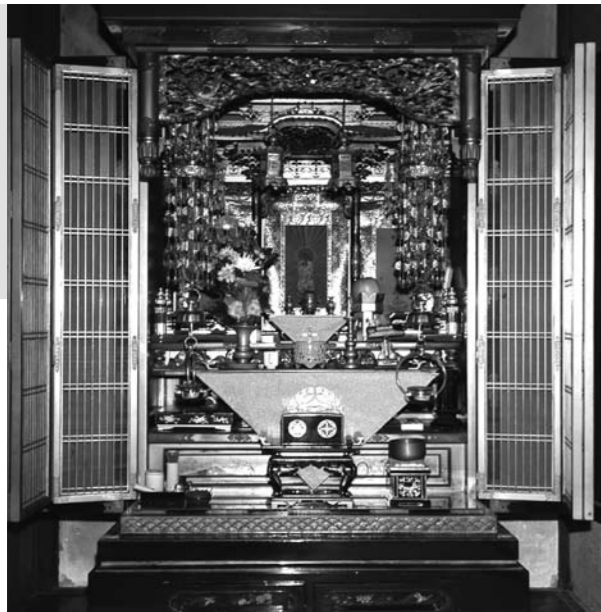
されている、あるいは心に構造化されている。

悲しみからの解放

山折 20年ぐらい前、小此木啓吾さんが日米の未亡人の比較をしたことがあるんです。自動車事故で未亡人になったアメリカのご婦人と日本のご婦人が、その悲しみ、苦しみから、どう解放され、癒されていくかということと比較した研究です。カリフォルニア大学の日系アメリカ人との共同研究だったと思います。大きな違いは、アメリカの未亡人の場合は、なかなか怒りと悲しみと苦しみから解放されない。最後までもがいている。ところが、日本の未亡人の場合は、比較的短期間に癒されている。なぜかという、日本人の場合は、だいたい仏壇の前で死者と対話を繰り返している。仏壇という癒しの装置が非常に大きな役割を果たしているのではないかというのが、そのときの仮説でした。

ベッカー 一昨年、ころの未来研究センターの準備段階でデニス・クラス教授に講演をしていただきました。間もなくその訳本も出版される予定ですが、彼が十数年前に小此木啓吾さんなどに基づいて、日本人は身内に死なれても、先祖や亡き夫がいっしょにいるんだという感覚があり、それが非常に癒しに重要であると指摘しました。英語でコンティニューイング・ボンズ (continuing bonds) という言葉で定着しています。そのクラス先生の理論が登場するまで、死別の悲しみは越えるべきものとされていました。フロイトの理論が主流だった精神医学では、死者を忘れられない人は病的である、という考え方が長い間支配的でした。クラス先生から出発して、亡くなった人とのつながりを持ち続けるほうがむしろ健全であるという研究がかなり多くなってきているし、多くの西洋人もそれに賛同しています。

ただし、残念ながら、最近の日本人でも、アメリカ人と同様に、怒りや悲嘆に暮れて、いつまでも癒されない傾向にあります。調べてみると、やはり仏壇などで対話しなくなっているのです。仏壇を通して対話することが非常に健全な行為であることが最近欧米でも認められているのに、日本人は、その慣習から遠ざかろうとする傾向にあるのは、まことに皮肉なことです。**山折** 核家族化して、マンションやアパートに住む人が増え、空間的にも仏壇を置くところがない。ところが、最近では小型の仏壇、小型の位牌がデザインを工夫して売られていて、若い人に比較的使われているようです。そういうものを置いている若者たちが、どういう心の変化を経験しているか。それはやっぱり



仏壇は死者と対話する癒しの装置

調査する必要があるでしょうね。

私はこの前、若者たちのための商品ばかり集めている店に行って驚いたんですが、文房具からペットやぬいぐるみみたいなもので何から何まで全部ある。けっこう若者たちもああいうものを飾って、自分の平常心を保とうとしているのかもしれないね。

オリンピック選手の意識の変化

鎌田 日本人の意識がどれくらい変わったのか、あるいは変わっていないのかを、いろんな方法論で探る必要があると思います。例えば、オリンピックでも、勝者に対して共感が寄せられるというのが1つの型ですね。しかし、日本人にとっては、敗者に対する共感も非常に重要な要素だと思います。判官びいきのような、敗れ去っていく者、あるいは悲しみをもって去っていく者に対して深い思いやりや共感を寄せるという文化構造は、とても重要な心のありようではないか。

ベッカー 私がティーンエイジのころ日本の文化に関心を抱いたきっかけの1つは、日本人がオリンピックなどで敗者となった場合に、コーチや家族、国民に対して「申し訳ない。これだけ助けていただいたのに勝てなかったのはすまなかった」というお詫びの仕方がすごく美的で、納得できたからです。

それに対して、アメリカ人は「ちょっと努力が足りなかった。今回はうまくいかなかったが、次回がんばります」というだけで、まわりの人に対する配慮はなかったのです。日本人は負けても強いつながりをもってお詫びできるのがすばらしいと感じたの

に、最近は日本の選手たちも、負けても「今日は調子が悪かったけど、またがんばります」と言うだけで、そのつながりを気持ちで示せなくなっていることが悔しいです。

鎌田 柔道の井上康生選手なんかは「悲」があったように思います。だから、今はそういう人物もいれば、そうでない人も出てきているということでしょうね。

山折 一昨年2月にイタリアのトリノで冬季オリンピックがありました。あのとき、日本の選手は連戦連敗で、一番最後に荒川静香さんがフィギュアで金メダルを取った。日本人選手のメダルはあれだけでした。

オリンピックが中盤に入ったころでした。だめだなと思ってNHKのテレビを見ていたら、画面に前畑秀子さんの表情が出た。生前の前畑秀子のオリンピックの栄光の時代を回想する番組を再放送していたんです。その中で前畑秀子が何を言っていたかという、彼女は1932年にロサンゼルス・オリンピックに出て女子平泳ぎ200mで銀を取ります。日本に帰ってきて、もう引退しようと思っていたところ、次はベルリンで金を取れという世論が巻き起こってきた。困ってお母さんに相談したら、お母さんが、「がんばってやりなさい。国民の皆さんにそう言われているんだから」と言う。その母の言葉を支えにして4年間練習をして、ベルリンの大会に出て、決勝レースまで進んでいった。飛び込み台に上るとき、心の中で「死ぬ覚悟で泳ごう」と言い聞かせた。そして、飛び込み台に上って、ピストルが鳴る直前、「神様!」と心に叫んだ——それを淡々と語っていたんです。「母」「死ぬ覚悟」「神様」。これは3つのキーワードだなと思いました。その映像は、負け続けているトリノの現地の選手たちに対する励ましのつもりで流していた。NHKも時にはいいことをやるなと思って見ていたんです。

その3つのキーワードは、前畑秀子だけでなく、当時の若者たちはみんなもっていたもので、国民も共有できた考え方だったのだなとあらためて思いました。それでは、現在のオリンピック、トリノにいった選手たちはどういうキーワードを心の支えにして出場しているのだろうか、ちょっと調べてみたんです。その結果、3つのキーワードが出てきました。それは、先ほどベッカーさんが言われたことと重なるんだけど、1つは、「自分らしくプレーする」。それはほとんどの選手が言っている。2番目が「楽しくプレーする」。3番目が「笑顔浮かべてプレーしたい」。これが現代の若者たちがオリンピックに出るときの3つのキーワードです。

先ほどの前畑秀子が自らに言い聞かせた3つのキーワードとものごく対照的です。70年間にどれだけ

価値観の変化が起こったのだろうか、私は愕然としました。これは負けるはずだと思ったんだけど、しばらくして反省しました。でも、荒川静香さんは金を取ったじゃないかと。それで、はっと思ったんです。荒川選手にじっくり話を聞いたら、彼女は練習の過程で「お母さん!」と叫んでいたのかもしれない。「死ぬ覚悟でがんばらなきゃいけない」と思っていたかもしれない。そして、「神さま、仏さま」と叫んだかもしれない。それは、メディアや日本の大人社会が、子どもたちの心の底に耳を近づけて深く聞こうとしていないということではないか。これはやっぱりわれわれの問題だ、日本の現代の社会の問題だと思ったんです。

そういう経験を私は何度かしたことがあるんです。今の子どもたちともじっくり話し合っていると、茶髪の間でも、思わぬことを言うことがある。それはわれわれの価値観とそれほど隔たっていない。先ほどの吉川さんの話もそうですね。だから、メディアや大人の常識にごまかされてはいけない。

鎌田 メディアと、あと、例えば、教室なら教室の人間関係の中で、ちょっと変わったことを言って突出すると自分はどうなるかみたいなことに対する過剰な防衛とか配慮が、生な自分の心の底にある言葉を出しにくい状況にしているのも事実だと思うんです。それを一皮むいていくと、それこそ河合隼雄先生の相談の中に出てくるような心の状況が出てくるんだと思います。そこで出てくるのは、さっき山折さんが言われたような言葉かもしれないですね。それは、隠されている、閉ざされているということかもしれない。

山折 去年の夏、世界陸上の大阪大会があった。あのとき、私が一番関心を持ったのが100mの決勝です。下馬評では、アメリカからやって来たタイソン・ゲイト、ジャマイカ出身のアサファ・パウエル、この2人の争いになるだろうと言われていたんですが、実際にそうなった。結局、その決勝レースで優勝したのはタイソン・ゲイトだった。終わった後、記者会見で彼が質問に答えている言葉に私ははっとしたんです。

スタートを切った時点で、ライバルのパウエルに遅れをとっていた。70mぐらいの時には肩ひとつぐらい抜かれていた。そのとき、母親の言葉が甦ったという

んです。その言葉が、「おまえのやっていることは価値がある。意味がある」。この2つの言葉が甦り、全身に力がみなぎって加速がついた。そして、70mぐらいのときに追い越した。数秒の間にそこまで分析できるかなと思うんだけど、そういう談話を残して、それが新聞の隅にちょこっと書いてあった。

私はこれにはびっくりしました。もっと大きな記事として書くべきだと思った。だって、この日本の男女共同参画社会においては、母の力とか、母の言葉なんていうことはほとんど言われなくなった。それがアメリカの黒人選手が、母の言葉で勝つことができたと言ったのですよ。

鎌田 オリンピック選手といえば、アテネ・オリンピックのときに女子マラソンで優勝した野口みずき選手が優勝インタビューで語った「走った距離は裏切らない」という言葉がとても印象的でした。文字どおり解釈すると、努力したものは報われる。決して裏切られることはない、ということになるんですけど、私はそういう表層的な意味じゃなくて、昔の言い方をすれば、「お天道様は見ている」みたいな、もくもくと努力したことを見守るものがあって勝利できたというふうな、謙虚な心を感じたのです。

山折 増田明美さんと対談したとき聞いたんですが、マラソンは42.195キロでしょう。これを自分たちは「死に行く」と読んでいます。あっと思ったんです。それは彼らの業界用語で、表にはほとんど出ません。日本の社会は相当いろんな価値観を隠蔽してきているのではないか。

「死ぬ覚悟」をめぐる

ベッカー 山折先生は、死について何冊もの本を書いていらっしゃるんですが、死に対する関心はどういうところから生まれてきているのでしょうか。

山折 9.11のテロがあって半年ぐらい経ったとき、文

アメリカ同時多発テロ
航空機2機が激突し、炎上する世界貿易センタービル
(提供:AFP=時事)

化庁長官だった河合隼雄さんから声をかけられて、京都で何人かの人といっしょに当時の首相の小泉純一郎さんと食事をしたことがあります。

そのとき、私は質問しようかしまいかと思っていたことが1つあった。それは、そういう場だから迷ったんですけれども、「言ってしまう」と思って言いました。9.11のときにブッシュ大統領が世界に向かって演説しましたよね。一番最後は、旧約聖書のダビデの言葉、「われわれは今死の谷を歩んでいる。神の加護のもとに進んでいこう」で締めくくっているんです。それを持ち出して、「ブッシュはそういう言葉でメッセージを結びましたが、もし首相官邸であのようなテロが発生したとき、首相はどのような言葉で、世界に向けて、日本人に向けて、メッセージを発しようとなさいますか」と言ったんです。そうしたら、小泉さんはしばらく天井の方を向いていましたが、一言、「ないな」と。

それは、私自身、あるいは日本人自身にその問いを向けたときにも、やっぱりすっとは出てこないだろうなと思っていたんです。旧約聖書の言葉に匹敵するような強い言葉が、われわれの文化伝統の中にあるだろうかと思いつながら聞いていたので、自分の問題でもあったわけです。しかし、首相は「ない」とおっしゃった。私はその場では何も言わなかったんだけど、腹の中では1つだけあるかもしれないと思っていた。それは「死ぬ覚悟」という言葉です。日本の文化の中では、そういう危機的な状況のとき、「死ぬ覚悟」とか「死」が非常に大きな意味を持っていた。武道、芸道、政治の世界など、歴史を探っていくと、それにかかわる強い言葉はいくつも存在していた。それが一瞬、小泉さんの口から出てくるかなと思ったんだけど、「ない」と言われた。

ところが、この間の衆議院選挙で自民党が大勝しました。あのときは「小泉選挙」と言われましたが、小泉さんは選挙運動の真っ最中、「自分はこの選挙を死ぬ覚悟でやっています」と言っていた。ああ、小泉首相から「死ぬ覚悟」という言葉が出てきたと思った。

「死ぬ覚悟」というのは、今はタブー視されている言葉ですよね。でも、やっぱり本音はそこだったんだと。そういうことは、前畑秀子の時代から小泉純一郎までずっとつながっているんだと思った。結局それしかないと思うんです。しかし、戦前の軍国主義の体験から、今は「死ぬ覚悟」って使っちゃいけない言葉になっているような気がします。だから、これも言葉の隠蔽ということの典型例ですね。

ベッカー 敵に殺される「死ぬ覚悟」の必要はなくてよくても、人間は全員必ず死んでゆきますね。ところが最近、医師も家族も、生に対して異常なほどの執着

を見せているようです。日本は先進国に類を見ないほどの医療費を使って、異常な延命装置や医療機械を末期患者につけています。客観的な調査をさせてもらうと、患者自身はそれを望んでいない。チューブ漬けになりたいという日本人は皆無に等しいんです。ところが、これでもか、これでもか、というチューブ漬けを頼むのが、患者自身ではなくて周囲の人々です。それは彼らが死を覚悟できていないからではないかと思うんです。

戦前までは日本人が世界で一番死を怖がらない民族だったという調査があります。ところが、戦争が終わって5年も経たないうちに、日本人が一番死を怖がる民族の1つに転じている。死がタブーになったのは、あまりにもむごい死がたくさんあったから、終戦直後からしばらくの間、もう死を語らないでいこうという空気が生まれたのはよくわかるのですが、その結果の1つとして、語られないものは怖いんですね。

山折 4～5年前、台風で舞鶴の由良川が決壊し、大洪水になりました。観光バスが洪水の中に閉じ込められて、37人の中高年の方々が全員救出されるということがありましたね。

その後、NHKが、あそこにおられた2～3人の女性の方をスタジオに呼んで番組をつくりました。実際はどういう状況だったのか。元看護師さんだった方とか、そういう方面の仕事をした人が中心になって、励ましたり、肩を組んだり、歌を歌ったり、心臓マッサージをしたり、そうして全員救出されたんです、と体験談を話しておられた。

そのとき、あるご婦人がこういうことを言われた。「私たちは全員助かるつもりで一生涯懸命やりました。1人でも犠牲者が出れば全員死ぬ覚悟で、生き残ろうという努力をして生きて帰ることができました」「死ぬ覚悟」という言葉が出てきたんです。私はそのときはと思った。その言葉はごく自然に出てきていた。

ところが、番組の最後に、NHKの司会者と防災関係の専門家お二人が出てきて総括した。「全員生き抜こう、助かろうと思ってこの危機を乗り越えることができたんですね」と、これで番組が終わったんですね。そこでは「死ぬ覚悟」の言葉が消されていた。

まとめとしてはそれしかないなと思うけれども、しかし、あの番組のキーワードはまさに「死ぬ覚悟」だったと思うんです。「1人でも犠牲者が出るなら全員死ぬ覚悟で」という言葉の重さが非常に印象深かったんですが、それがやっぱりマスコミ的な正義というかな、メディアの総括の仕方としては具合が悪いという判断でしょう。専門家もそれに同意していたわけですから。

水没した観光バス
2004年10月21日、台風23号の大雨で舞鶴市を流れる由良川の水があふれ観光バスが水没した。写真はバスの屋根に避難して救助を待つ乗客ら(提供:第8管区海上保安本部)

吉川 言霊のようなものを信じるかどうかは別にしても、私たちは死や病に関わることは直接は言わないで済みます、といったことがある気がしますね。言霊は鎌田さんの研究の中にもありますけれども、それを口にすることによって、言ったことが現実化してくるというような気持ちがあるのかもしれない。

私自身はあまりそういう考え方をしない人間だと思っていたんですけれども、センターのプロジェクトとして、ベッカーさんが癌患者の介護の研究をされています。私は両親を癌で亡くしているものですから、プロジェクトの一覧表をぱっと見ると「癌患者」という言葉が目飛び込んでくるように見えました。それはちょっときつい、と。もう少し一般的な、病気の介護というような言葉に替えてもらえないかという話をしたことがあります。癌患者の方々についての研究をされているわけですから、それが正しい表現なんだけれども、私はあまり使ってほしくないな、と。

「死ぬ覚悟」というようなことばは、最近では滅多に聞きませんが、内心にはあっても表には出さないほうがいいというタブーのような感覚があるのかもしれない。

ベッカー 9.11の直後に、日本のいくつかの新聞から私のところに電話がかかってきて、「テロをどう思いますか」とコメントを求められました。もちろん、決してテロを肯定するつもりはないと断った上で、「もしもあなたが道を歩いていて、だれかにいきなり殴られた場合、考えずに殴り返すのか、それとも相手の心を探ろうとするのか、どっちなのか」と聞いたんです。

「確かに、とんでもない悲劇が今ニューヨークで起きているようですが、まず相手はだれなのか、そして、その裏の心が何なのかということを知らないでは答えようがないのではないかと。いきなり殴られた場合、私があなたに何か悪いことをしたのか、あるいは人違い

なのか、いったいなぜこれが起きているのか、ということをまず知ることが大切ではないですか」と申し上げたんですが、どの新聞も、そのコメントは載せませんでした。いきなり、どう軍事的にやり返すかというところに転じてしまっ

ても、さっきの怒りと悲しみと関連していると思います。人生が思うようにいかないとき、苦しいと思うときに、だれかを殴ろうとするのか、それとも、いったい自分のどこが悪いのかと考えて煩惱執着を断ち切ろうとするのかでは大きな違いです。

「こころの未来研究センター」への期待

鎌田 最後に、山折さんに「こころの未来研究センター」に期待することを一言お願いします。

山折 今、若者世代と、私ら中高年世代との間に、特に心に対するジェネレーション・ギャップがあるように見えるんですが、本当にそうかなと思うことがあります。もっと両方に共通する心のあり方が、いろんな場面であるような気がします。それを再発見していくことが、これからの日本の未来に希望をもたらしてくれるのではないかなとね。そういう面でのご研究をしていただくとありがたいと思います。

鎌田 そういう日本人の老若男女に共通する心のありようが、はたして現在どのようにあるのか。また、先ほどの、「無私」とか「母」とか「死ぬ覚悟」とか、そういうキーワードになるような言葉が持つ意味、価値、シンボリズムというものも含めて、いろいろと「こころの未来研究センター」では研究していく課題と役割があると思っています。

今日は本当にありがとうございました。

(2008年5月19日 京都大学にて)

世阿弥における「無心」の厚み

西平 直 Tadashi Nishihira
(京都大学教育学研究科教授)

世阿弥の名は久しく禅の思想と結びついてきた。世阿弥は禅を極め、無心を体得し、その境地において舞台上で舞った。その『伝書』は宗教(禅)と芸術(能)の根源的な一致を物語る……。

と、そうした話をたくさん聞いてきた私は、ある時期から、不思議な違和感に襲われた。『伝書』を読むたびに、「無心」とは全く逆の、舞台上の工夫や作戦が目についてしまうのである。これはまだ私の理解が浅いからに違いない。そう思って繰り返し読むのだが、読めば読むほど、そのテキストは、舞台を成功させるための意識的な工夫や用心について語っている。

舞台人の知恵や気配りと言えは聞こえはいいが、実際には、観客との駆け引きである。加藤周一の言葉に倣えば「観客を化かす手練手管」が語られているのである。

むろん「無心」も出てくる。しかしそこで語られるのは、雑念の消え払った純粹無雑な静寂ではなく、むしろそこに至りつくまでの困難である。あるいはそれを目指す途上で体験される当事者の葛藤である。そしてなによりその困難や葛藤を乗り越えるための工夫や用心が語られるのである。

「せぬ所が面白き」

少し具体的にテキストを見ることにしよう。『花鏡』第十四条「万能を一心に縮ぐ(つなぐ)事」。有名な「せぬひま」の話である。

話は観客からもらった批評の言葉で始まる。能の舞台は「せぬ所が面白き(何もしない所が面白い)」。科

白や仕草よりも、そうした技芸が止んだ休止部こそ面白いというのである。ではなぜ観客の目にそう映るのか。世阿弥は答えて、演技手がその休止部(せぬ所)においても集中を切らさないためであるという。世阿弥自身の言葉では「心をつなぐ」。あるいは、「心を捨てずして用心を持つ」。

「……あらゆる品々の隙々に心を捨てずして、用心を持つ内心なり」。

気を抜いて「心を捨ててしまう」のではなく、自分の心を繋ぎ止めておく。心を散漫にさせない。集中の糸を切らさない。舞台の一曲(演目)全体を通じて途切れることなく心を繋ぎ止めておく。

この箇所は、時に、「張り詰めた緊張の糸」と理解されることもあるのだが、もし「緊張」という言葉に、固くなるとか身構えるというニュアンスが含まれてしまうとすれば、それは違う。「心をつなぐ」は、集中しているのだが、固まらない。むしろ流れ続ける。一曲の全体を通じて高い強度を維持したまま、しかし固まることなく、心の根底において静かに流れ続けている。

そうした濃密なテンションを秘めた集中は、もちろん、科白や仕草といった演技の中にも働いている。ところが観客の目には、それが、むしろそうした演技のなくなった「せぬひま」においてこそ、はっきり映る。何もしていないように見える、まさにその空白の時間においてこそ、張り詰めた心の集中が浮き彫りになる。だから「せぬ所が面白き」。一曲全体を貫く心の集中が、観客の目に浮き彫りになって「面白き」を呼び起こすというのである。

「我心をわれにも隠す」

ところが、世阿弥はこう付け加える。

それは、おのずから、外に「匂い出てくる」のでなければならない。決して意図的に集中してはならない。演技のなくなった「せぬひま」においてこそ心を集中させよう、などと意図してしまったら、もはやその時点で「せぬひま」ではなくなる。集中を切らさぬ意図や工夫が観客に見えてしまったら、それは既にひとつの技芸である。そして技芸になってしまえば、もはや「せぬ」ではない。「もし見れば、それは態になるべし。せぬにてはあるべからず。」心の集中は、あくまで「匂い出る」ように観客の目に映るから、魅力なのである。

「この内心の感、外に匂ひて面白きなり」。

では、心の集中を切らさぬよう工夫しながら、しかもその工夫を観客に気づかせないためには、どうすればよいのか。

世阿弥は「我心をわれにも隠す」という。自分の心を自分に隠してしまえ。観客に対して隠すのではない。自分自身に対して隠す。そして自分の心の工夫すら意識しなくなるほど、深く演技に集中せよ。その深い集中のなかで「せぬひま」の前後をつなぎ止めよというのである。

そして、ここに「無心」という言葉が出てくる。「無心の位にて、我心をわれにも隠す安心にて、せぬ隙の前後をつなぐべし」。

しかしこの文章をいかに理解したらよいか。世阿弥の言葉はしばしば多義的な意味を含むから、現代語に置き換えると回りくどい説明文になる。たとえば、この一文はこう訳される。「演者はみずから無心無我の境地にはいり、自分の配慮を自分でも意識しないほど深く演技に集中し、その集中力によって技芸の間隙の前後をつなぐようにするべきである」(山崎正和訳)。

もっとも、この問題は、西洋語の

翻訳者たちにとって一層切実であって、例えば、この「無心の位にて」という言葉ひとつとっても、ある英訳はThe actor must rise to a selfless level of art, と訳し、別の英訳は、At the rank of no-mind, とする。ドイツ語訳は Eintretend in den Bereich des >Nicht-Herzens<, フランス語訳は、C'est au degré de la non-conscience, である。

「無心」と「一心」

しかし、本当に興味深いのは、それに続く文章であって、世阿弥はこの「無心」を「一心」と言い換えるのである。

「これすなはち、万能を一心にてつなぐ感力なり」。

この「一心」を、ある英訳は one intensity of mind、別の英訳は a Single Intent とする。そのどちらも「一心」という言葉に含まれる微妙なニュアンスを解きほぐすための有効な手がかりを提供してくれているのだが、今はともかく「無心」ではなく「一心」という点に目を留める。

すべての技芸を「無心」にてつなぐのではない。「一心」にてつなぐ。ということは、言葉だけ見れば、何らかの心の働きにおいてつなぐと言っていることになる。そこで、この段階の世阿弥ははまだ「無心」の境地に至り得ていない、という批判がある。いまだ「働く心」が有る。「有心」を滅却し切っていない。

しかしこの「一心」は、舞台上の当事者の体験としては、「無心」と別ではない。言い換えれば、この「一心」をいまだ「有心」に過ぎないと批判する視点は、舞台人世阿弥のリアリティから離れている。舞台においては、すべての技芸を根底において貫く「一心」がそのまま「無心」なのであって、それ以上、その「一心」まで消し去った「無心」を、世阿弥は舞

台に求めなかった。

と、言い切ることができれば、話は簡単なのだが、実は、その『伝書』には、やはり「一心」まで消し去った「無心」を語る箇所がある。ということは、問題はむしろ、世阿弥がそうした「無心」を舞台に求めたのか、それとも舞台とは別の所に求めたのか。実は、「一心」までも消し去った「無心」の境地を書き始めた時、世阿弥の心は舞台のリアリティから離れ始めたのではないか。

それとも、やはり、舞台をつなぎ止める「一心」がそのまま同時に、「一心」を消し去った「無心」である、と理解すべきなのか。

世阿弥の「無心」は透明な厚みを持っているようである。

無心

北山 忍 Shinobu Kitayama
(ミシガン大学心理学部教授)

する。どうやら、日本人の多くは自分の利益を考える際に、他者の利益とついつい比較してしまうらしい。自分のところに予算がいくらつくかより、それが他の部署より多いのか少ないのかの方に気が向いてしまうのだ。その結果、自分の仕事は放っておいて他者を何とかしてけ落とそうとするといったように、さもしい貧弱な精神が見られることがある。しかし、何も悪いところばかりでもない。他者や他の部署と切磋琢磨してお互いに競い合うこともある。根は一緒のところにあるのだ。

自他があまりに依存しあっている、互いに比較しあっていないと気がすまないというこのメンタリティーは他のいろいろな側面に見ることができる。たとえば、近年多くの心理学者が「注意の幅」に文化的な違いがあると指摘してきている。京大の卒業生で現在カナダにいる増田貴彦君が行った研究では、アメリカ人と日本人が日常のいろいろな場面のどこに注意を当てるのかが検討されている。結果は明らかで、アメリカ人の方は中心的な「もの」に注意をあてるが、日本人は「もの」と周囲の関係の方により多くの注意を配分するという。

欧米人の場合、まず対象がある。もちろん対象を周囲に関係づけることはできるのであるが、まず注意を向けて考えるのは対象なのである。よって、社会的場面では他者の利益はさておき、まず自分の利益の絶対量を考える。これに対して日本人の場合、まず周囲との関係がある。もちろん対象について考えることはできるが、その考えはあくまでも周囲と相対的なものになる。よって、社会的場面では自分の利益の相対量を

考えるのである。

暗黙の心理特性と明示的な自己認識

さて、ここまで見てきた例ではすべて、実際に観察しているのは実験参加者の行動である。たとえば、西條先生の研究では、実験参加者がどのような報酬分配の方略をとるかが観察されている。これらの観察に基づいて日本人は関係志向、かつ関係依存であると結論している。これらの実験で実験参加者は、自分は包括的な注意を持っているとか、私はこういう報酬分配の方略を使っているなどとはっきり言っているわけではない。おそらく尋ねたところで、自らの行っていることを正確に言い当てることのできる人はまれであろう。つまり、これらの心理特性は、いわば無意識的かつ自動的であり、その意味で、暗黙のものであるといつてよい。

興味深いことに、「自分はX X Xだ」といったように明示的な自己判断を見てみると、日本人、特に若い人は、関係性を否定する傾向がとても強いということがわかっている。暗黙の指標では極めて関係志向・依存であるが、明示的な指標では関係否定的であるというこの矛盾はどのように理解したらよいのだろうか。

私は、暗黙の心理特性の方は、文化が何世代にもわたって蓄積してきた日常の習慣によって育まれてきているのではないかと考えている。日本の文化は、古来農耕を基盤にして発展してきたが、これに儒教・仏教といった基本的に人間関係を重んじる思想が加わって成り立ってきている。これらの日常の習慣はとても関係志向的で、思わず知らず、いわば自動的にまわりに注意が行ってしまう暗黙の心理特性はこれに対応しているのである。

これに対して関係性を否定し、自分の利益を利己的に追求しようとする明示的な自己認識の方は、メディアなどをはじめとするいろいろな情報源から得られた知識に基づいている。特に日本では戦後この方、関係性とは「昔の」「古い」もので、これらの関係性から解放されることが近代化の要件であるといった議論が特にインテリ層を中心になされてきた。西洋の個人主義とは、個人の権利を根底において社会関係を作り上げる考えだが、すでに世間に埋め込まれ関係性になんじがらめになっている日本人にとって、「コジンシュギ」とはすでにある関係の「呪縛」から解放されることだったのだ。丸山真男などはそのような論壇の中心だった思想家だ。

関係否定的な個人主義の流れ

個人主義とは実はとてもあいまいな概念で、近代西欧の社会基盤を築いた、「社会関係をつくる大前提としての個人」という考えは、実は幾多ある個人主義の定義の中のひとつでしかない。話はちょっとわき道にそれるが、しばらく前にフランス人の知り合いと話しているとき、ヨーロッパの各地にあるヌーディスト・ビーチの話になったことがある。なぜ大の大人がよりもよって素っ裸になりたがるのだろうかというきわめて率直な疑問をぶつけたところ、この知り合いは、ヌードになることはすなわち社会的制約すべてをとりはらうことであり、この意味において個人主義の表現に他ならないと説明し、こちらは妙に納得した覚えがある。個人主義と一口に言っても、そのために裸になる人もいれば、関係性を切り捨てる人もいる。

いずれにしても日本においては、関係を否定することは「新しく」、

「近代的」で、かつ「進歩的」なことなのだという議論が戦後半世紀の間に日本全域に急速に広まった。全共闘時代まではインテリだけにとどまっていたが、バブル期に一流商社のビジネスマンに広まり、拝金主義を標榜した彼らは「エコノミックアニマル」の悪名を世界にはせた。さらにバブルの崩壊後は、今度はこれが日本全国の津々浦々まで及ぶ。たとえば、「自己責任」の名の下に地方のコミュニティは崩壊し、人間関係や組織の規範などに修復不可能なほどひびが入ってきているところも多いように思われる。現代の若者が明示的にはとても関係否定的だというのは、過去四半世紀日本を覆ってきているこのような思想の流れの中に位置づけてみるとよく理解できる。

ここに見られる現代日本人の自己矛盾は、どのような効果をもっているのだろうか。

悪循環がもたらすもの

そこで、1つ思考実験をしてみよう。ここに関係性があったはじめてやる気になり、関係性があった初めて目が輝き、そして関係性があった初めてどこに注意を向けたらよいか了解する人間がいたとしよう。ところがこの人は同時に、関係性のゆえに自分は本当の自分になれないでいると強く信じているとしよう。するとどうなるだろうか。まず試験で失敗するなど何か悪いことが起きると、これは何らかの関係性、たとえば、友達関係が悪いからだというように考えるだろう。すると、何とかして関係性を切り捨てようとするだろう。しかし、関係性を切り捨ててしまうと、やる気も失せ、注意も散漫になり、目から輝きも消えてしまう。そこでますます悪いことが繰り返して起きる結果になる。実際の原因

は、自分の暗黙のメンタリティーを了解せずに関係を否定していることにあるのだ。だから、関係を回復したらよい。しかし、すべての諸悪は関係にあると信じているから、当人はそうとは考えず、ますます関係性を切ってしまう。これは悪循環である。暗黙のうちに関係志向の人が明示的信念として関係を切り捨てると極めて深刻な結果が生じると予測できる。

私は、この悪循環が最近の日本社会が抱えてきている諸問題、たとえば無気力、自殺、引きこもり、ニート、出生率の異常な低下などと密接に結びついているのではないかと考えている。このような推論は、今の時点ではあくまでも1つの仮説にすぎない。しかし、このころの未来研究センターの研究の一環としてこの点をより厳密に検討することで、現代の諸問題に積極的にいろいろな提言ができたならば素晴らしいことである。すくなくとも、学問の社会還元という意味からすると、このころの未来研究センターあたりで是非本格的な研究をやって現代日本の心の病と社会の停滞の中に一筋でもいいから光明を見いだしていただきたいと期待している。

関連文献

Kitayama, S. (2002). Cultural and basic psychological processes-toward a system view of culture: Comment on Oyserman et al. *Psychological Bulletin*, 128, 189-196.
Kitayama, S., Duffy, S., Kawamura, T., & Larsen, J. T. (2003). Perceiving an object and its context in different cultures: A cultural look at new look. *Psychological Science*, 14, 201-206.
Kitayama, S., Duffy, S., & Uchida, U. (2007). Self as cultural mode of being. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.), *Handbook of cultural psychology*. Guilford Press.
Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
Masuda, T., & Nisbett, R. E. (2001). Attending holistically versus analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 992-934.

こころと「神秘世界」

鎌田東二 Toji Kamata
(こころの未来研究センター教授)

福来友吉・柳宗悦・宮沢賢治の「心理学」的探究

に深く共感しつつも、それぞれ普遍的で根源的な人間の心の潜在能力の目覚めを確信し、自ら実践的にそれを探究した。そして、福来は財団法人日本心霊研究所を、柳は日本民藝館を、宮沢は羅須地人協会を設立して、独自の精神世界探究を試みたのである。その3人の心理学的探究の内実を考察することで、「こころの未来」と「未来のこころ」の在り処や可能性について探ってみるのがこのセミナーのテーマであったが、ここでは紙幅の限りもあるので、福来友吉の探究について報告してみる。

さて、日本人として最初の東京帝国大学理科大学物理学教授となり、2度目の東京帝国大学総長を務めていた山川健次郎は、大正3年(1914)8月19日、第6代京都帝国大学総長に就任し、翌大正4年6月14日まで2つの帝国大学の総長を兼務することになった。この会津白虎隊の生き残りであった物理学者は長岡半太郎らを育てた教育者で、アメリカ留学時に船中で日本人として初めてカレーライスを食べ、現在の京都大学の「総長カレー」の先達となった人物でもあるが、「千里眼事件」においては、「千里眼」(透視)や「念写」にはきわめて懐疑的で、それを批判する立場をとった。

その「千里眼=透視」や「念写」なるものを大真面目に精神物理学=実験心理学として物理的に証明しようと取り組んでいたのが、東京帝国大学文科大学助教授の福来友吉であった。千里眼=透視実験とは肉眼で見ることなしにその存在を言い当てる実験であり、念写実験とは厳重に隔離された写真の乾板に特殊能力を持つ被験者が抱いたイメージを焼き付

ける実験で、特殊能力を持つ御船千鶴子や長尾郁子を被験者として実験を試みた。福来は同大学の初代心理学教授元良勇次郎の愛弟子であったが、この「千里眼事件」により東京帝国大学助教授の職を辞職せざるを得なくなったのである。

元良勇次郎は明治23年から大正元年まで東京帝国大学教授を務め、在職中に没したため、後継者と目していた愛弟子を護ることができずに世を去った。大正2年に休職し同4年に辞職した福来の後を受けて東京帝国大学の心理学教授に就任したのが松本亦太郎で、松本は大正2年から大正15年まで教授を務め、日本心理学会の初代会長にも就任することになる。歴史にifは無意味であるが、もし福来が東京帝国大学の心理学教授となり、日本心理学会の初代の会長に就任していたとしたら、日本の心理学は超心理学やトランスパーソナル心理学や宗教心理学の先進国となっていただろうと想像せずにはいられない。

その福来友吉は、明治2年(1869)に岐阜県高山に生まれ、明治32年(1899)に東京帝国大学を卒業後、大学院に進み、元良勇次郎の下で心理学を学んで、明治39年(1906)、『催眠の心理学的研究』により文学博士の称号を受け、明治41年(1908)に東京帝国大学助教授に就任し、元良の後継者と目されていた。

しかし、明治43年(1910)、福来は京都帝国大学医科大学精神病学教室の今村新吉博士(後に教授となる)とともに透視(千里眼)公開実験を行い、山川健次郎や藤教篤らにその真偽のほどを疑われ、翌明治44年に行った念写実験では藤に手品と批判されたことがきっかけで、休職・辞職に追い込まれたのだった。その後、福来は高野山宝城院で真言密教の修行に励み、大正15年(1926)には高野山大学教授に就任、昭和3年

(1928)には財団法人日本心霊研究所所長となり、同年9月にロンドンで行われた国際心霊学大会に出席し、念写の研究発表をしている。昭和15年(1940)には高野山大学教授を辞職し、心霊研究に集中した。戦後は、東北心霊科学研究会顧問に就任したが、昭和27年(1952)82歳で没した。著作には、『心理学精義』(明治35年)『催眠心理学概論』(明治38年)『催眠心理学』(明治39年)『心理学講義』(明治40年)『教育心理学講義』(明治41年)『心理学教科書』(明治42年)『透視と念写』(大正2年)『心理学審義』(大正3年)『心霊の現象』(大正5年)『生命主義の信仰』(大正12年)『観念は生物なり』(大正14年)『精神統一の心理』(大正15年)『心霊と神秘世界』(昭和7年)などがある。

福来は、精神物理学(実験心理学)からウィリアム・ジェームズの心理学への共感を経て催眠研究へ分け入り、そこからさらに透視(千里眼)・念写研究・心霊研究へと参入していったのである。透視や念写の研究に入る前に著した『心理学講義』は、ウィリアム・ジェームズと元良勇次郎の影響下、「緒論・精神の機関・連合・本能・習慣・類化と応化・注意・感覚・観念・認識・推理・情念・欲念・精神と身体との関係」の15章で構成され、「附録」として「苦悶と救済と無我」「聖者を論ず」「幻覚的神」「聖者の見魔」「催眠術の原理及実験」が論述されている。

「第十五章 精神と身体との関係」では、丹田や白隠や白隠の師の白幽子に言及して、「白隠禪師は、当時白河の山深き所に住せる白幽先生の許を訪ひ、是に初めて回生の妙法を得たり。回生の妙法とは結局精心を丹田に凝らして、無念無想の境に入ることに外ならず」と述べ、「附録 其の三 幻覚的神」においては宗教的経験が「実在の感得」であることを

指摘し、「宗教的経験は厚生(厚生の)経験なり生命なき所に生命を得るの経験なり」「宗教的実在は無我を以て感すべきものなり無分別智を以て証すべきものなり」と主張し、「日本的靈性」が「無分別智」であると説いた鈴木大拙にも通じる見解を示している。

また、同書の「附録 其の四 聖者の見魔」には、釈迦成道時の「魔王」の解脱妨害の出来事について言及され、「精神の分裂」や「複重人格」などの視点からの考察が例えば「第二人格の悪魔として現出」などとして「精神病者の悪性第二人格」と比較され、さらには、「止観」(座禅・瞑想)の修行中に現れる「悪魔」について、



福来友吉



山川健次郎

(提供: 京都大学大学文書館)

「悪魔の大部分は、旧来の悪心悪念の悪性第二人格となりて現出せるものと推断して差支えなきが如し」と考察しているのである。

福来は、このころ宗教新聞の「中外日報」紙上で、「面白い心」として、「センチメンタル・ポジビリティ」あるいは「メンタル・ポジビリティ」について触れ、具体的には「千里眼」と「根本識」(識原)を取り上げ、「精神現象固有の研究法によりて出来たる心理学は科学者の定義する科学にならぬであらうけれども、それは精神其物の本性より生ずる結果で、已むを得ざることである」とか「超個人的なる精神原理の存在」と主張している。こうして福来は、千里眼=透視や念写の研究から心霊研究や神通力や念力の研究に向かい、終には「霊の存在とその活動」について論じるに至るのである。

福来が千里眼や念写研究に没頭した明治43年は、ハレー彗星が地球に接近し、それにより地球も人類も滅亡するという流言が広まり、パニックが起こった時代であった。わたしはそれを「ハレー彗星インパクト」と名づけて、地球史的・文明史的ターニングポイントであると考えているが、西田幾多郎が倫理学担当の教官として京都帝国大学文科大学助教授に就任したのが明治43年8月31日で、西田は翌明治44年1月に満を持して『善の研究』を出版し、ウィリアム・ジェームズやヤコブ・ペーメに言及しながら、「純粹経験」の問題を考察した。その問題意識は福来の試みを含め、同時代の新思潮心理学の探究課題と確実に連動していたのである。

関連文献

鎌田東二『神界のフィールドワーク——霊学と民俗学の生成』青弓社、1985年
鎌田東二「柳宗悦と宮沢賢治と出口王仁三郎における宗教と芸術」『Genesis第12号』京都造形芸術大学、2008年10月刊
鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、2008年

センターの動向 (2007.4～2008.9)

- 2007年4月1日、京都大学こころの未来研究センターが正式に発足しました。
- 5月26・27日、日本認知心理学会第5回大会においてサテライトワークショップ Workshop on "Visual Cognition" and "Memory and Language"を開催しました。
- 6月24日、京都新聞に「異分野結集、「こころ」探求」(吉川左紀子センター長寄稿)が掲載されました。
- 7月8日、百周年時計台記念館百周年

ホールで京都大学こころの未来研究センター設立記念シンポジウム「こころの探求」を開催、学内外から300名を越す参加がありました。シンポジウムでは、尾池和夫総長の祝辞のあと、吉川左紀子センター長からセンター設立経緯、活動内容、スタッフの研究紹介があり、続いて行動生態学の長谷川眞理子(「こころの進化」)、文化心理学の北山忍(「文化とこころ」)、教育人間学の西平直(「こころと無心」)の各氏による記念講演、最後に、講演者と本センターの4教授(河合俊雄、船橋新太郎、カール・ベッカー、吉川左紀子)による総合討論「こころの探求」が行われました。シンポジウム終了後、国際交流ホールで設立記念祝賀会が開催され、麻生純京都府副知事、上原任京都市副市長、尾池和夫総長、岡本道雄元総長、木下富雄京大名誉教授、丸山企画担当理事、松本研究担当理事をはじめ多数の関係者が出席して、新センターの門出を祝いました。

●9月18日、日本心理学会第71回大会(東洋大学)において、本センター連携プロジェクトのワークショップ「共感的対話における相互作用性に関する多角的研究」が開催されました。企画者:桑原知子(京都大学、本センター連携研究員) 話題提供者:桑原知子、渡部幹(早稲田大学、本センター連携研究員)、長岡千賀(京都大学、学振特別研究員) 指定討論者:仁平義明(東北大学)、名取琢自(京都文教大学)、司会:吉川左紀子(本センター)。

- 第3回博報「ことばと教育」研究助成に、久保南海子助教の研究課題「ことばの読みに困難を抱えた児童に対する早期療育法の検討」が採択されました(京都大学霊長類研究所正高信男教授・伊藤祐康さんとの共同研究)。
- 2008年2月3日、NHK衛星第2放送で、昨年12月に時計台百周年記念ホールで行われた京都文化会議2007の様子が放映されました。番組名:BSフォーラム「地球化時代のこころのゆくえ」。
- 2月26日、NHKのTV番組(「爆笑問題のニッポンの教養」)にカール・ベッカー教授が出演しました。
- 3月1～3日、第3回こころの未来ワークショップ「日本文化とこころの行方——『こもる』ことの意味」を開催しました(京大会館)。1日は「ひきこもりの国」の著者 Michael Zielenziger (米国ジャーナリスト)、文化心理学の北山忍(ミシガン大学)、臨床心理学の河合俊雄(センター教授)の各氏が講演を行い、続いて社会心理学の嘉志摩佳久氏(メルボルン大学)が加わって総合討論を行いました。2日は、Emotion Regulation および Culture, Social Relationship, and Well-being、3日は Culture and Emotion というテーマで、Dacher Keltner (UC Berkeley)、Heejung Kim (UC Santa Barbara)、Eunkook Suh (Yonsei University)、Vinai Norasakkunkit (Minnesota State University)、Yulia Chentsova-Dutton (Georgetown University)、北山忍、嘉志摩佳久、唐沢穂(名古屋大学)、佐々木淳(大阪大学)、内田由紀子(本センター)の各氏および日韓米の大学院生による研究報告と討論を行いました。
- 3月、京都大学基金の中に「こころの未来基金」が設置されました。
- 科学技術振興機構:社会技術研究開発事業研究開発成果実装支援プログラム「e-ラーニングを核とする多様な学習困難に対応した地域単位の学習支援ネットワークの構築(実装責任者:正高信男京大霊長研教授)」(平成20年度～22年度)

- が採択されました。本センターは当プログラムの実装拠点の1つとなります。
- 4月20日、AJAJ日本ユング心理学会主催の「河合隼雄先生追悼シンポジウム」に本センターの鎌田東二教授、河合俊雄教授がシンポジストとして参加しました。
- 5月9日、朝日新聞夕刊に「寺院は癒やしのテーマパーク」が掲載されました。
- 平成20年度(第19回)立石科学技術振興財団研究助成に、番浩志助教(認知神経科学、脳機能イメージング)の研究課題「網膜部位再現性を利用した視覚関連fMRI脳活動の表示・解析手法の開発」が採択されました。この研究は本センター船橋新太郎教授、人間・環境学研究科・齋木潤教授、山本洋紀助教との共同研究です。
- 8月26日～30日、インドネシア、バリ島ウブドゥ村において、大橋力氏(文明科学研究所所長)の企画協力により本センター連携プロジェクト「京都における癒しの伝統とリソース」の研修を実施しました(参加メンバー:吉川左紀子、鎌田東二、河合俊雄教授、内田由紀子助教、畑中千紘、大石高典研究員、渡邊克巳、駿地眞由美連携研究員)。
- 9月19日～21日、日本心理学会第72回大会(北海道大学)において、ワークショップ「文化と進化とこころの未来」が開催されました。企画者:内田由紀子(本センター)、平石界(同) 話題提供者:大坪庸介(神戸大学)、内田由紀子、平石界 指定討論者:長谷川寿一(東京大学)、村本由紀子(横浜国立大学)。また、同大会において本センター連携プロジェクトのワークショップ「共感的対話における相互作用性に関する多角的研究II」が開催されました。企画・司会者:桑原知子(京都大学、本センター連携研究員) 話題提供者:長岡千賀(京都大学、学振特別研究員)、小森政嗣(大阪電気通信大学、本センター連携研究員)、渡部幹(早稲田大学、本センター連携研究員)、吉川左紀子(本センター) 指定

朝日新聞2008年5月9日夕刊、京都大学こころの未来研究センターの研究活動の紹介

討論者:大山泰宏(京都大学)、仁平義明(東北大学)、木下富雄(国際高等研究所)。

●鎌田東二教授の著書が出版されました。『聖地感覚』鎌田東二著、角川学芸出版。『神楽感覚』鎌田東二・細野晴臣著、作品社。

●久保南海子助教の論文が掲載されました。

「学習に困難を伴う子どもの言語学習支援プログラムとそれに伴う認知機能・脳機能の変化について」福島美和・久保南海子・正高信男著、発達障害研究、2008、30、185-194。

「ヒトと動物の回顧的推論について」川合伸幸・久保南海子著、認知科学、2008、15、378-391。

●内田由紀子助教の論文が掲載されました。

「日本文化における自己価値の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証—」内田由紀子著、心理学研究、2008、79、3、250-256。

Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J.A.S., Morling, B., "Is Perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures," Personality and Social Psychology Bulletin, 2008, 34, 741-754.

「文化と感情:比較文化的考察と組織論への意義」内田由紀子著、組織科学、2008、41、48-55。

●9月30日、本センター別館(京都市左京区田中関田町2-24 京都学生支援会館2階)の改修工事が終わり、研究室・研修室・実験室等の利用が可能になりました。

スタッフ紹介

〈教授〉

●吉川左紀子(よしかわ・さきこ)

京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士(教育学・京都大学)。認知心理学・認知科学。著書『顔の再記憶に関する実証的研究』(風間書房)『顔と心: 顔の心理学入門』(編著書、サイエンス社)他。顔・表情を手がかりに自己や他者のこころの理解・コミュニケーションのしくみを研究。

●船橋新太郎(ふなはし・しんたろう)

京都大学大学院理学研究科動物学専攻(霊長類分科)博士課程中途退学。京都大学理学博士。専門は神経科学、認知神経科学。著書『前頭葉のなぞを解く』(京大出版会)ほか。大学院時代より一貫して前頭連合野の機能に関する研究を実施している。前頭連合野の機能の解明をとおして人のこころのなぞを解明したいと考えている。

●Carl Becker(カール・ベッカー)
ハワイ大学大学院東西文化センター哲学研究科修了。博士(東西哲学・ハワイ大学)。1973年初来日後、四半世紀以上日本で研究している。南イリノイ大、阪大、ハワイ大、筑波大を経て、京大で教鞭をとる。死生学・宗教学・医療倫理学・生命倫理学。著書に『生と死のケアを考える』『死の体験』『いのちと日本人』等多数。

●河合俊雄(かわい・としお)
京都大学大学院教育学研究科博士課程中退。PhD.(チューリッヒ大学・心理学)臨床心理学・ユング心理学。著書に『概念の心理療法』『ユング』『心理臨床の理論』、共著に『心理療法とイニシエーション』『心理療法と医学の接点』など。心理療法と身体の関係、心理療法と超越性、現代における意識とこころ観などについて研究。

●鎌田東二(かまた・とうじ)
國學院大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。博士(文学・筑波大学)。宗教哲学・民俗学・日本思想史・比較文明論。石笛・法螺貝奏者。著書『翁童論』四部作(新曜社)『宗教と霊性』『聖地



に「進化心理学: 理論と実証研究の紹介」(2000年)、「Maintenance of Genetic Variation in Personality through Control of Mental Mechanisms」(2008年)など。最近では進化的視点と双生児研究を結びつける方法を模索している。

〈特定研究員〉

●大石高典(おおいし・たかのり)
京都大学理学研究

科博士課程研究指導認定退学。理学修士。生態人類学専攻。アフリカ熱帯林にて、小集団社会と自然環境との関わりを研究。

●有田 恵(ありた・めぐみ)
京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士(人間・環境学)。生涯発達心理学。死生学。人の生における死の意味についての研究。

●畑中千紘(はたなか・ちひろ)
京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。臨床心理学。心理臨床場面における語りの聞き方、他者のこころの捉え方についての研究など。

〈日本学術振興会特別研究員〉

●長岡千賀(ながおか・ちか)
大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士(人間科学)。認知心理学、感性情報心理学。会話の「間」や身体動作のシンクロに関する検討。

●渡邊 慶(わたなべ・けい)
京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程卒業。博士(人間・環境学)。認知神経科学。テーマ: 意思決定に関与する前頭連合野神経機構の解明。

〈リエゾンオフィスタッフ〉

宮原道子、木原香代子、柴崎 暁子、中川明美、安井大輔

〈事務スタッフ〉

千代進一、榎本賢也、竹中和香子、河内晴美、林芳男

感覚』(角川学芸出版)他。宗教・哲学・芸術を中心にこころと世界観・価値観・人生観・生き方について研究。

〈助教〉

●久保(川合) 南海子(くぼ・かわい・なみこ)

日本女子大学大学院人間社会研究科心理学専攻博士課程単位取得退学。博士(心理学・日本女子大学)。認知発達心理学、比較認知心理学。加齢にともなう認知機能の変化とその行動的な特徴に関心を持っている。また、自閉症や学習障害児を対象に療育プログラムによる脳機能の変化などの研究も進めている。

●番 浩志(ばん・ひろし)
京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士(人間・環境学)。認知神経科学・脳機能イメージング。私たちに豊かな視覚世界を提供してくれる脳の情報処理メカニズムをfMRIなどのイメージング技術を用いて研究。

●内田由紀子(うちだ・ゆきこ)
京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士(人間・環境学)。文化心理学・社会心理学。著書『わたしから社会へ広がる心理学』(北樹出版、分担執筆)『Handbook of Cultural Psychology』(Guilford Press, 分担執筆)他。感情や対人関係の文化比較を中心に、こころと文化の関係を研究。

●平石 界(ひらいし・かい)
東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。進化心理学・認知科学。論文

本誌の刊行には稲盛財団より援助をいただきました。

編集後記

「センターの研究活動を広く知らせる定期刊行物を作りましょう」。教員会議での鎌田教授の力強い一声で決まった『こころの未来』の刊行が、ここにスタートします。「京大にこんなセンターができる」と喜んでくださった山折先生、「自然体でゆっくり進んで」と励ましてくださった尾池総長、「哲学をしっかりと勉強なさい」と激励してくださった岡本元総長、ご多忙の中、読み応えのある論考をお寄せくださった先生がた、どうもありがとうございました。(吉川)

本センターに着任してすぐ、「こころの未来研究センター」というユニークな名称を持つ研究センターの特徴や活動内容をわかりやすく、魅力的に伝える媒体が必要であると思った。その提案が受け入れられて、『こころの未来』という定期刊行物を年2回(9月と3月)発行することが決まった。創刊号の編集作業を手伝いながら、センターの万華鏡のような多彩さと今日的意義を改めて認識し直した。いやあ、おもしろいとこやなあ。(鎌田)

「こころの未来研究センター」、この新鮮な響きは私たちの想像力をかき立ててくれる。摩訶不思議で、かけがえがなく、時には恐くもある「こころ」をめぐる、これからどんな研究が展開されてゆくのだろう。この学術広報誌が、学問の新しい息吹を感じとっていただけるものになれば幸いである。(原)

こころの未来 創刊号

発行日 2008年9月30日

発行 京都大学こころの未来研究センター
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
電話 075-753-9670
FAX 075-753-9680
<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/>

2008年11月17日より、こころの未来研究センターは下記に移転します。電話番号、FAX番号は変わりません。
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学稲盛財団記念館内

表紙写真 大石高典(インドネシア・バリ島の棚田)
編集・制作 編集工房レイヴン 原 章
デザイン 鷲草デザイン事務所 尾崎閑也
印刷 株式会社NPCコーポレーション